

平成27年度

青少年赤十字国際交流事業
フィリピン派遣

—実施報告書—



平成27年8月9日(日)～15日(土)



日本赤十字社福島県支部
青少年赤十字福島県指導者協議会



目 次

1. あいさつ（日本赤十字社福島県支部事務局長）	2
2. フィリピン派遣に寄せて（派遣団長）	3
3. 派遣団員名簿	4
4. 交流日程	5
5. 訪問地（図表）	6
6. 訪問日誌	8
7. フィリピンを訪問して（派遣団員所感）	19
8. 自由研究（高校生団員）	47
9. 事前・事後研修会の開催	63
10. 報告会の開催	64
11. 実施要項	65
12. 持参の交流物品 編集後記	67

※1 フィリピンの学校について

フィリピンの小学校は1～6学年、高校が1～4学年となっている。フィリピンの高校は日本の中学校の1～3学年と高校の1学年にあたる。

※2 ソルト・パヤタスは、正式には「特定非営利活動法人ソルト・パヤタス」であるが、文中ではソルト・パヤタスと標記している。

あ い さ つ

日本赤十字社福島県支部

事務局長 野 崎 洋 一

福島県支部が行う青少年赤十字国際交流事業「フィリピン派遣」は、青少年赤十字の実践目標の一つである「国際理解・親善」を実践するため、広く世界の国々に目を向け、海外の青少年赤十字メンバーとの交流を通じて国際性豊かな青少年を育成することを目的に、平成18年度から実施してきました。

東日本大震災等により一時中断がありましたが、平成25年度からは福島県支部が海外救援金を基に行う復興支援事業の一つとして再開し、平成27年度で7回を数えたところです。

東日本大震災から4年8カ月が経過しました（平成27年11月現在）。福島県では医療や環境分野を始め、本県の未来を拓く様々な拠点の整備が進むなど明るい光が増してきた一方で、原発事故の影響もあり、今もなお復興に向けて様々な課題が山積しています。

このような中で福島県支部では、本県復興の担い手となる青少年を自然災害に苦しめられることの多いフィリピンに派遣し、大震災に際して寄せられた支援への感謝と「福島」の今の姿を直接伝えるとともに、フィリピン赤十字社の活動を学びフィリピンの青少年と交流を深めることにより、広い視野で他人を思いやり様々な困難に立ち向かうことのできる人材を育成したい、との思いからこの事業を企画しました。

外国を訪問しその国の青少年や赤十字社との交流をすることは、本県の青少年にとって素晴らしい経験になります。しかし、JRC（青少年赤十字）の実践目標の一つである「国際理解・親善」を実現するには、訪問国であるフィリピンと日本との交流の歴史をよく知り理解したうえで行うことが求められます。

フィリピンと日本との間には長い交流の歴史がありますが、太平洋戦争という不幸な時代もありました。派遣団員を集めた最初の説明会の際、今年が戦後70年の節目の年であり、太平洋戦争では日本がフィリピンに侵攻、占領し、同国に甚大な被害を与えた歴史があることを話しました。移動日も含めて7日間という厳しい日程の中で、フィリピンの人たちと実のある交流を行うために、過去の不幸な歴史にも目を向けて欲しいと思ったからです。

今回派遣された高校生は事前に合同で研修を行ったり、それぞれが自由研究のテーマを決めて勉強したりするなど、フィリピンについての知識を深めた上でこの国際交流事業に臨んでくれました。

大震災と原発事故という未曾有の災害に見舞われた福島県は、復興に長い時間を要することでしょう。日本国内はもとより海外の人々に復興に取り組む「福島」の姿を、そしてそこで暮らす福島県民の本当の姿をよく知っていただき、引き続き温かい気持ちを寄せていただければと願っています。そのためには「福島」の未来を担う若者が積極的に国内外に出て行き、多くの人たちと交流を深め情報発信していくことがとても大切だと考えています。

今回の派遣事業に参加したのはわずかに7名の高校生ですが、彼らの体験がJRCで一緒に活動する仲間にも共有され「国際理解・親善」の輪が少しずつ、そして確実に広がっていくことを心から願っています。

結びに、今回の青少年赤十字国際交流事業の実施に当たりご支援、ご協力をいただいた関係者、関係機関の皆様にご心より感謝を申し上げます。

平成27年度 青少年赤十字国際交流事業 「フィリピン派遣」に参加して

派遣団長

福島県立あさか開成高等学校

吾 妻 美 和

日本赤十字社福島県支部主催の復興事業の一環であるフィリピン派遣事業に、県内青少年赤十字メンバーの代表7名と引率顧問2名、日赤福島県支部職員2名の合計11名が参加した。フィリピン赤十字本社や各支部を訪問し、東日本大震災後の支援に対する感謝を表し、お互いの協力関係を確認し合うとともに、小学校、高等学校では日本紹介を含めて交流活動を行った。

事前研修での初顔合わせから実際の派遣までの約2ヶ月間、派遣における意義や目的について学ぶと共に、交流内容についての検討と準備を重ねた。加えて、各自の研修におけるテーマを考え、フィリピンの医療や衛生問題などのテーマが定まるとともに派遣に対する意識が高まるのが感じられた。

派遣は、フィリピン赤十字本社の新社屋の見学から始まり、マニラ支部の他に、ケソン支部、バタアン支部、バラング支部、ラス・ピニャス支部を訪問した。各支部では支部長をはじめ、関係する方々が集まってくださり、福島からの派遣団の訪問を喜んでくださった。特にバタアン州のバラングでは、1泊2日の滞在中、ユースボランティアと行動を共にし、一度も稼動していないバタアン原発見学や市内見学、サマット山や戦争記念博物館見学を行った。派遣メンバーやユースメンバーは、英語や日本語を混ぜて交流を図りながら友情を深めており、バラングを経つときには別れがたさを感じたようだった。

滞在中に小学校、高校の3校を訪問したが、いずれも学校をあげての大歓迎で、子どもたちのハイレベルな歌や演劇、地域別のダンスなどに驚くと共に大変感激した。そして、研修中に訪れた学校はどこも、書道や絵描き歌、日本の伝統的な遊びやよさこいなど、日本文化紹介に大変興味を示してくれた。日比の間には歴史的に複雑な思いがあるのも事実であるが、若い世代のこうした交流が新しい関係を築く礎になってくれるものと期待している。

今回の研修で私たちは、フィリピンの方たちのあたたかい気持ちに触れ、その笑顔の一方で、貧困と闘いながらもたくましく生き抜こうとする人間の強さにも触れた。国際化が求められる今の日本において、私たちにできる支援とは何か、国際親善の在り方について考えさせられる7日間であった。この貴重な機会を与えていただいた日本赤十字社福島県支部の方々、関係者の方々に心から感謝し、今後のJRC活動にこの体験を生かしていきたい。



フィリピン赤十字本社にて

「フィリピン派遣」参加者



山口 愛由美

福島県立
福島高等学校
2年



小松 紗綾

学校法人成蹊学園
福島成蹊高等学校
2年



大木 信二

学校法人東稜学園
東稜高等学校
2年



佐藤 佑樹

学校法人松韻学園
福島高等学校
3年



高橋 里加

福島県立
あさか開成高等学校
2年



田代 美月

福島県立
白河実業高等学校
3年



箱崎 瑠依

学校法人昌平黌
東日本国際大学附属昌平高等学校
2年



菅野 勇一郎

福島県立本宮高等学校
青少年赤十字顧問



吾妻 美和

福島県立あさか開成高等学校
青少年赤十字顧問



小林 俊之

日本赤十字社
福島県支部
組織振興課 社員係長



葛岡 大輔

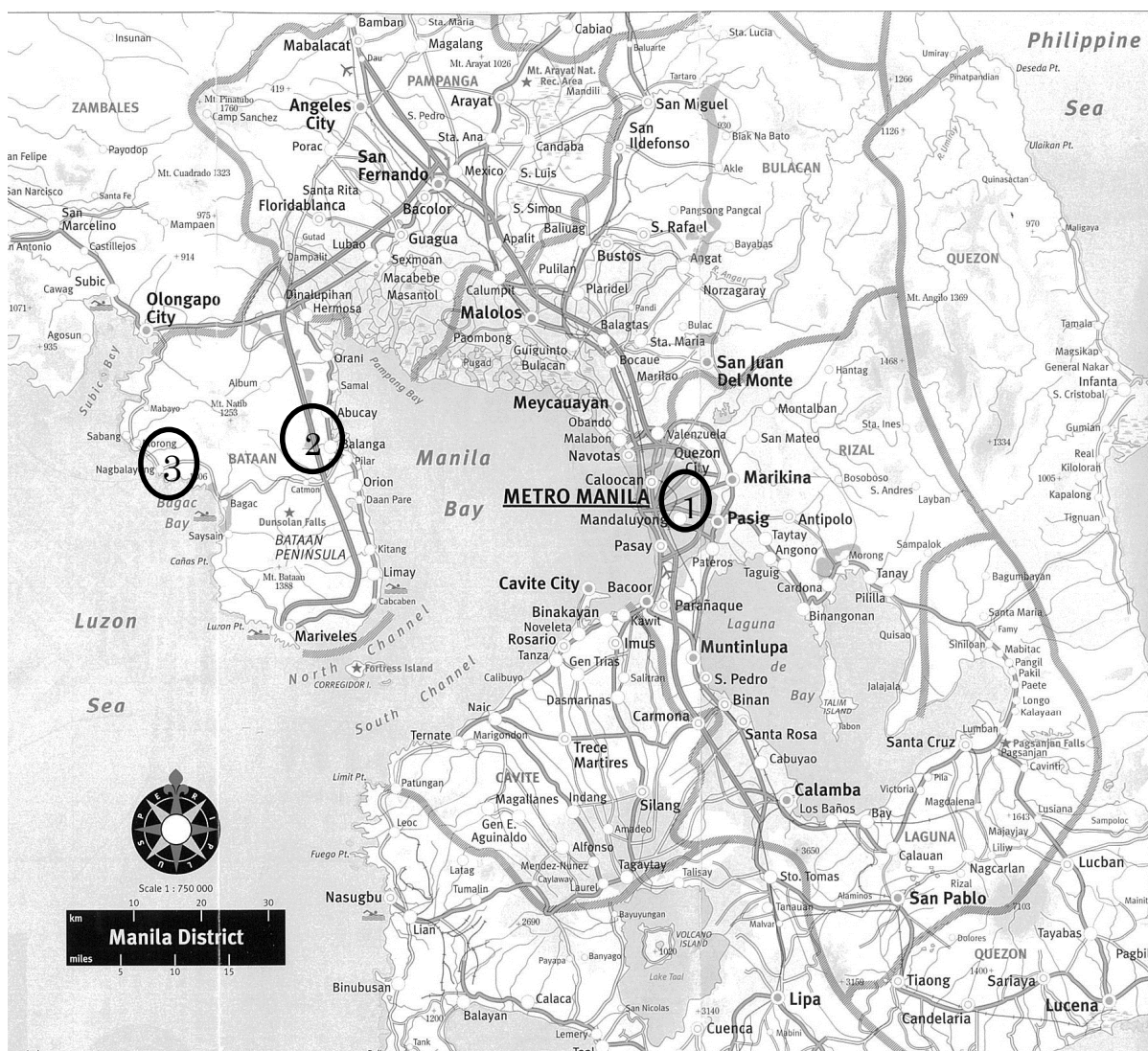
日本赤十字社
福島県支部
事業推進課 主事

交 流 日 程

	第 1 日	第 2 日	第 3 日	第 4 日	第 5 日	第 6 日	第 7 日
日付 曜日	8 月 9 日 日	8 月 10 日 月	8 月 11 日 火	8 月 12 日 水	8 月 13 日 木	8 月 14 日 金	8 月 15 日 土
5							起床
6		起床	起床	起床	起床	起床	朝食
7		朝食	朝食	朝食	朝食	朝食 移動	ホテルチェックアウト マニラ国際空港到着
8		移動	移動	移動	公設市場見学 移動	ラスピニャス副支部訪問 ラスピニャス副支部 ユースメンバーと交流会	
9		フィリピン赤十字 本社訪問	ケソン支部訪問 ルパン・パンガコ 小学校訪問交流		サマット山戦争資料 館見学、ゼロポイント モニュメント見学、 フレンドシップタワー 見学	リサイクル施設見学	
10	10:00 福島(支部) 発 貸切バス			↓			10:05 マニラ国際 空港発 JAL746便
11	11:00 郡山駅前発			バタアン支部訪問			
12	↓		ルパン・パンガコ 小学校にて昼食	バタアン支部職員・ バタアンユースメン バーと昼食会	バタアン支部職 員・ユースメン バーと昼食会	ヴィリアーさん 宅にて支部職員 共に招待昼食会	
13	12:30 いわき湯本IC発	昼食(Jollibeeにて) フィリピン赤十字 社関係者と会食	移動		バタアン原発見学	移動	
14	(途中休憩)	マニラ支部訪問	ソルト・バヤタス訪問 交流 慰霊碑見学、集落視 察、家庭訪問、 LIKHA見学、子ども 図書館見学	バタアン公立高校 訪問・交流		モールオブアジア見学	
15	15:30 成田空港到着	マニエル高校 訪問交流会			↓		15:00 成田空港到着 入国手続き
16	チェックイン			バンガラマー ケット見学 (戦争資料見学等)	マニラへ移動	移動	16:00 成田空港発 貸切バス
17							移動
18		移動	移動	バタアン支部職員・ バタアン支部ユース メンバーとの懇談 夕食会			18:20 いわき湯本IC着
19	19:20 JAL745便	市場見学 夕食(魚料理レストラン)	夕食				19:20 郡山駅着
20		ホテル到着 打ち合わせ	ホテル到着 打ち合わせ		夕食 ホテル到着 打ち合わせ		↓
21						フィリピン本社職 員とお別れ夕食会	20:20 福島(支部) 着
22				ホテル到着 打ち合わせ		ホテル到着 打ち合わせ	
23	23:45 マニラ 国際空港着						
24	ホテル着 打ち合わせ						
1							
宿泊	マニラ市内ホテル (デュシタニ・マニラ) 到着	マニラ市内ホテル (デュシタニ・マニラ)	マニラ市内ホテル (デュシタニ・マニラ)	バンガラ市内ホテル (クラウンロイヤルホテル)	マニラ市内ホテル (デュシタニ・マニラ)	マニラ市内ホテル (デュシタニ・マニラ)	

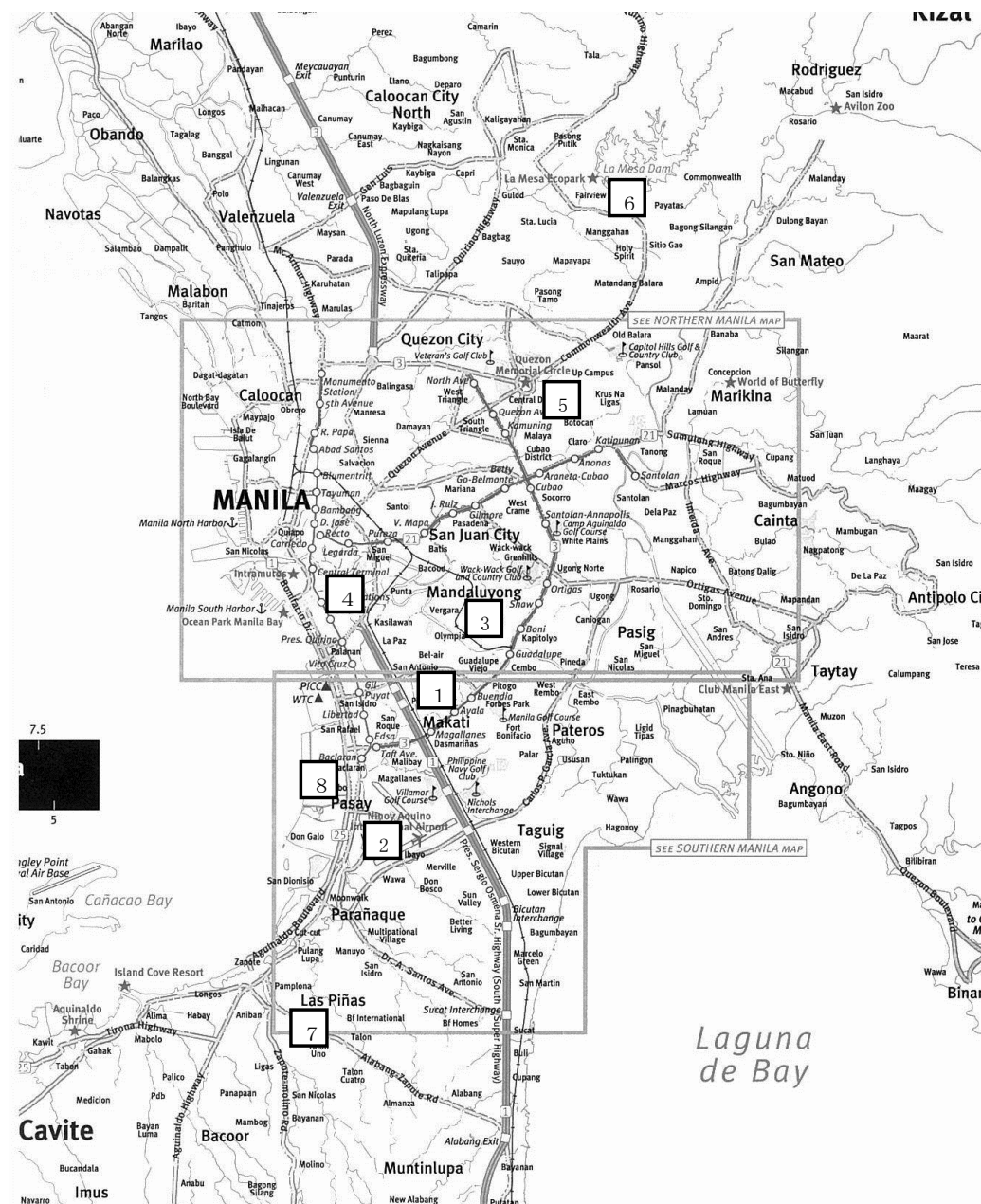
訪問先、活動内容 マニラ首都圏、バタアン州
 フォリピン赤十字本社 フィリピン赤十字支部
 フィリピン赤十字事業実施箇所見学
 小学校、高校(交流会、授業参観、先生の説明)
 青年ボランティアとの交流
 史跡見学 NGO活動視察・意見交換 など

2015年フィリピン派遣 訪問箇所（広域）



位置No.	訪問地	訪問日	活動内容
1	マニラ首都圏	8月10日(月)	午前：フィリピン赤十字本社訪問 午後：マニラ支部、マニエル高校訪問・交流
1	マニラ首都圏	8月11日(火)	午前：ケソン市支部訪問、ルパン・パンガコ小学校訪問・交流 午後：ソルトパヤタス訪問、住民と交流
2	マニラ→バタアン州	8月12日(水)	午前：ホテル→バタアン市支部 午後：バタアン公立高校訪問・交流、バンガラマーケット見学（戦争資料見学）
3 1	バタアン州	8月13日(木)	午前：公設市場見学、サマット山、戦時中の遺跡見学 午後：バタアン原発見学→マニラへ移動
1	マニラ首都圏	8月14日(金)	午前：ラス・ピニャス副支部訪問、リサイクル施設見学 午後：リサイクル施設見学、モールオブアジア見学

2015年フィリピン派遣 訪問箇所（メトロマニラ）



位置No.	訪問地（地名）	訪問日	活動内容
1	Dusit Thani Manila	8月9、10、11、12、14日	宿泊ホテル
2	ニノイ・アキノ国際空港	8月9日到着、15日出発	
3	フィリピン赤十字本社	8月10日(月) 午前	表敬訪問、報告
4	マニラ支部	8月10日(月) 午後	赤十字支部、学校訪問
5	ケソン市支部	8月11日(火) 午前	赤十字支部、学校訪問
6	Payatas（パヤタス）	8月11日(火) 午後	事業視察、家庭訪問、散策
7	ラス・ピニャス副支部	8月14日(金) 午前～午後	赤十字副支部、リサイクル施設見学
8	パサイ（モールオブアジア）	8月14日(金) 午後	施設見学

訪 問 日 誌

【1日目】 8月9日(日) 天候: 雨(フィリピン)

記録者: 山口愛由美

●日 程

- 10:00 日本赤十字社福島県支部 (福島市)
バス出発
- 11:00 郡山駅発
- 12:30 いわき湯本IC (いわき市) 発
- 15:30 成田空港着
- 19:20 成田空港発 JAL745便
- 23:45 マニラ国際空港到着
(フィリピン時間 22:45)
- 24:05 ホテル着
- 24:10 打合せ

てきた。

約4時間で、フィリピンのマニラ国際空港に無事到着、空港の外に出ると、気温26℃と日本よりも低いのだが、湿度が高かったので蒸し暑く感じた。マニラ空港からホテルに向かうバスから見た景色は、電飾がキラキラと輝き綺麗だった。しかし、道端の今にも倒壊しそうな家を何軒も見ると、フィリピンの光の部分と影の部分を垣間見た心持になった。ホテルに到着後、明日の活動内容確認・役割の確認などを行い、いよいよスタートする本格的な活動に積極的に臨もうと福島メンバーの心を一つにした。

●所 感

一日目の日程は、大半が移動だった。参加者の中には、海外も飛行機搭乗も初めてというメンバーもいたので、不安が多かったようだ。不安を感じると同時に、新しいことに挑戦することができる機会に心弾む思いも強かった。

成田空港の国際線出発ロビーで、グランドスタッフの方が、いろいろな国の利用者と英語で対応している姿に感動した。飛行機に乗り込むと、さらにフィリピン派遣の不安と期待が湧き上がっ



成田国際空港にて

訪 問 日 誌

【2日目】 8月10日(月) 天候: 曇り

記録者: 佐藤 佑樹、大木 信二

●日 程

- 9:00 フィリピン赤十字本社訪問
- 13:00 フィリピン赤十字本社の方たちと昼食
- 14:00 赤十字マニラ支部訪問
- 15:00 マニユエル高校訪問 交流会
- 19:00 市場(魚・果物)見学・夕食
- 20:30 本日のふりかえり・打合せ

●所 感

【フィリピン赤十字本社訪問】

最初に、フィリピン赤十字本社のブライアンさんより、2013年フィリピンに甚大な被害が出た台風の話と台風被害について、フィリピン赤十字がどのような活動をしたかスライドにより紹介して頂いた。「その台風は、中部のビサヤ地域を東から西に横切る形で通過し、約1,700万人が居住する広範な地域に対して、フィリピンの台風警報で最高段階にあたるシグナルNo.4が発令されたこと(シグナルNo.4とは風速51m/s以上の風が12時間以内に予想される場合に発令される警報)その台風により、死亡・行方不明は1万人にのぼり、1,600万人の家屋が一瞬のうちに無くなったこと。ココナツ農園に大被害を及ぼし、大木が根こそぎ倒れ、ライフラインは大規模に断絶し、地域全体で深刻な被害が出たこと。その災害に対して、フィリピン赤十字は、迅速に救護活動にあたった。」という話など画像を取り入れ分かりやすく説明して下さった。甚大な被害が出た台風だったが、1万人を超える赤十字のユースボランティアが意欲的に活動し、その迅速な働きはフィリピンでも高い評価を得たようである。その中の一人の女性についてのお話をしてくださったが、その内容は、

「離れ離れになった自分の家族を探すよりも他の被害者の支援を優先した。」というものだった。



フィリピン赤十字本社にて災害救助車両の説明を受ける

利他主義の考えがフィリピンには広がっていることを感じた。最後に、「フィリピン国民は、日本からの物資の支援、技術者派遣等について感謝していること。特に、川の水を飲料水にする機械装置を寄贈してもらい、生活に欠かせない飲料水が、被害者の手元に渡すことができたことについてとても助かった。」という感謝の言葉で講話を締めくくられた。スライドの上下にあった「Volunteers + Logistics + Information technology = Always First, Always Ready, Always There」という言葉も心に残った。ブライアンさんの講話の後、ジャンさんとカレンさんに、本社の中を案内していただいた。献血ルーム、血液を管理している装置、フィリピンの災害情報管理室(24時間体制)などについて、丁寧な説明をしていただいた。本社建物の前には、日本から寄贈された「救助工作車」があり、その車両の説明もあった。担当している方から、「災害現場で救助工作車は大いに役立っているという感謝の言葉と、でも日本語表記の部分もあり少し困っている。」というお話があった。本社見学の後、会議室に戻り、生徒リーダーの山口さんから本社の事務局長グウェン

ドリン・パンさんに、福島からのお土産を渡した。フィリピン本社から私たちに、フィリピン赤十字グッズ詰め合わせを頂いた。フィリピン赤十字の活動の凄さを間近で見ることができ、とても勉強になった。

【マニエル高校訪問（交流会）】

初めての交流会でとても不安だったが、マニエル高校の皆さんは、温かく歓迎してくれた。フィリピンの伝統的な踊りから、トウモロコシを使った踊り、アップテンポな体操、空手など披露してくれた。練習を一か月前から取り組んだそうなので、どれも見事な演技であった。私たちの発表は、フィリピンの生徒が、ただ見ているだけではなく参加型にすることで、とても盛り上げることができた。よさこいの披露でもフィリピンの生徒はノリが良くて、最後は大合唱してくれた。踊っていて、とても楽しかった。交流会が終わった後は、沢山の生徒と一緒に写真を撮ってほしいと言われ、日本のメンバーはスターのような気分を味わうことができた。その後、facebookを教えてほしいと言われたので教えた。フィリピンでのSNSはTwitterよりもfacebookの方が多く使われているのだと思った。交流会のプログラムがすべて終了すると、マニエル高校の先生方から、フィリピンの伝統的なお菓子サピン・サピンをご

馳走になった。疲れた体にありがたい甘いお菓子だった。

【2日目のふりかえり（反省会）】

夕食後、ホテルに戻り、ロビーで一日の活動についてふりかえりをした。一人一人から反省点・改善すべき点・明日の抱負を話し合った。①赤十字本社でもマニラ支部でもマニエル高校でも大歓迎で迎えていただき感激したこと。②マニエル高校の出し物のクオリティーが高いことに驚いたこと。③自分達の出し物も改善すべき点として、フィリピンの生徒1人1人にプレゼントした竹とんぼとジェット風船の渡す方法などがあげられた。④反省点はあるが、最初としてはまずまず合格点だったこと。特に、よさこいは、予想以上にみんなの踊りが合っていたので、引率の先生方も感心したという話があった。



マニエル高校での交流会後、よさこいの法被姿

訪 問 日 誌

【3日目】8月11日(火) 天候: 晴れ

記録者: 高橋 里加、田代 美月

●日 程

- 8:00 ホテル発 (マイクロバスで移動)
- 9:00 ケソン支部訪問
- 10:30 ルパン・パンガコ小学校訪問
- 12:00 ルパン・パンガコ小学校で昼食
- 13:30 ソルトパヤタス訪問
- 19:00 夕食 (マクドナルド)
- 20:30 本日のふりかえり・打合せ

●所 感

【フィリピン赤十字ケソン支部訪問】

ケソン支部では、昨日とはまた違った雰囲気を感じた。特に良かったのは、私たち福島JRCメンバー1人1人にパートナーが付いてくださり、より深い交流ができたところである。会話の中でうまく英語が出てこないこともあったが、ジェスチャーや単語を言って何とか伝えることができた。もっと英語を勉強していればよかったと後悔しながらも言葉が通じなくても笑顔で相手に伝えようとする気持ちが大切なのだということが強く感じた。また、ケソン支部から赤十字のメダルやマグボトルや絵画をいただくなど歓迎していただいた。拝見したケソン支部の活動紹介映像には、小学生からおじいちゃん、おばあちゃんまで、全ての年齢層がボランティア活動をしている映像が印象的だった。フィリピンでは、ボランティアが生活に根付いていると感じた。

【ルパン・パンガコ小学校訪問】

小学校訪問でも私たちを大歓迎してくださった。特に、小学生のキラキラした瞳が印象的であった。交流会では、2日目の反省を生かし、一人一人が積極的に動けたのでスムーズに進めるこ

とができた。特によさこいでは、ステージの形を見て前列と後列の立ち位置を変えるなど臨機応変に対応することができ、JRCで培った先見が活かされたと思った。書道もドラえもんの絵描き唄もよさこいも我々の全ての出し物に、喜んでもらえて、とてもうれしかった。特に、書道では、ルパン・パンガコ小学校の生徒に、当て字で書いたものを10人くらいプレゼントした。とても喜んでくれた。フィリピンの生徒の発表は、踊りも歌も上手で完成度の高さに驚いた。表情もとても良く、かわいらしい笑顔が印象的だった。交流会の後、図書室でフィリピンユースメンバーと一緒に昼食をとりながら会話を楽しんだ。あっという間に時間が過ぎたように感じた。



歓迎の歌声

【ソルトパヤタス訪問】

2000年7月10日、パヤタス地区のゴミ山の崩落事故によって、子どもから大人まで数百名の人が生き埋めになる大惨事が起こった。ごみ山のすぐ傍に住み、山でリサイクル資源を拾い集め、少ない現金収入を得ていたパヤタスの人たちは、この事故によって家族を失い、家を飲み込まれ、収入源も失った。崩落事故で亡くなった方の慰霊碑の

ある広場で、被災者であるシェリーさんのお話を聴いた。崩落事故により、一瞬のうちに、当時住んでいた自宅は、押し寄せるゴミに潰されてしまい、そして、シェリーさんの息子さんは腕を切断することになってしまったそうである。切断してからの息子さんは、いじめられ、ふさぎこむことが多かったそうだ。そんな息子さんに、シェリーさんは、「いじめに負けるな」と言い続けたそうである。その甲斐あって、息子さんは、今、人生を前向きに生きるという気持ちが出てきたと話してくださった。また、幸せを感じる時はいつですか、という質問に対して、シェリーさんは、「考えてみたけど思いつかないなあ…」と言われた時は涙が出た。しかし、その後、なんとか、言葉として出たのが、「家族といるときかな」という一言だった。その時に、少し救われた気持ちと家族がいることの幸せさを改めて感じた。集落の視察や家庭訪問で普段の生活の話などを聴いて、フィリピンの貧困問題をひしひしと感じた。もともと谷だった場所にごみがたまり平地になり、そこにまた、ごみが積み上がり巨大なごみの山となった風景は、一番印象的だった。テレビや本で見たことはあったが、想像をはるかに超える大きさに思わず息をのんだ。もし、この先また崩落事故が起きたらと考えると、ぞっとして言葉が出なかった。ごみによって人が死ぬなどあってはならないと強く思った。パヤタス地区では一部しか水道が通っていない。また、通っていても使える時間帯が決まっていると聞いた。食生活は、朝食におかずは無く、米とコーヒーだけで済ませる家庭が多く、稼ぎが少ないと夕食は食べられないとシェリーさんの子ども達に聞いた。そのせいか小柄で実年齢より幼く見える子ども達が多く、年齢を聞いてみると、4歳だと思っていた子が7歳、13歳だと思っていた子が16歳だった。私は、フィリピンの貧困地区では食生活環境が悪いことから、成長過程に遅れが出ているのではないかと思った。また、

一部の子どもは、貧しい家庭環境から学校にも通うことが出来ず、ゴミ山からゴミを拾い家計を助けて生活していた。以前はパヤタスにゴミ山はなかったそうだ。マニラ市などの街のゴミが捨てる場所がなく、パヤタスのゴミ捨て場に運ばれるようになったそうである。パヤタス地区のRCY^{*}の方に聞いた。なぜ日本と違いゴミ処理施設がないのか？国自体が、ゴミを焼却処分することは有害物質を発生させるため禁止しているということである。私達日本人は、幸せな環境の中で生活していることを気付かされる一日となった。ソルトの方たち、パヤタス（貧困街）で暮らす人たちの話、姿勢から多くのことを学ぶことができた。特に、パヤタス生まれ、パヤタス育ちのミゼットさんの「政府、大企業に頼るのではなく、貧しくても自分ができることをやることが重要。自分のこと、自分はなんでこうなのだろうと考えることが大切。貧困は、私たちの頭の中にあるもの。なんとかできる、無くせるという気持ちを持つことが重要。人を尊敬すること、他の人を尊重することが、人間にとって、とても大切。」というお話が心に響いた。福島メンバー1人1人が、自分がやるべきことを実践していこうと強く心に誓うことができた一日になった。



ソルト・パヤタスのリカセンターの内で

※RCY

（レッドクロスユースの意）日本のJRCにあたる

訪 問 日 誌

【4日目】 8月12日(水) 天候: 雨のち晴れ 記録者: 大木 信二、箱崎 瑠依

●日 程

- 7:30 ホテル発
- 11:00 バタアン支部訪問
- 12:00 支部職員・ユースメンバーとの昼食会
- 14:00 バタアン公立高校訪問・交流会
- 16:00 バランガマーケット見学
- 18:00 支部職員・ユースメンバーとの夕食会
- 22:00 本日のふりかえり・打合せ

●所 感

【赤十字バタアン支部訪問】

バタアン支部に着くと、RCYのメンバーが傘を持って笑顔で温かく迎えてくれた。RCYのリーダー、チェリーさんはユーモアでムードメーカーでもあると分かった。昼食はRCYのメンバーと福島メンバーが、交互に座り交流した。その後、プレゼントにマグカップを頂いた。レストランでは、音楽が流れていて、アナと雪の女王の“Let it go”が聞こえてくると、RCYの方々も「知ってる!!」と言って話が弾んだ。食事の後には、音楽に合わせてダンスをして、とても楽しい時間となった。RCYの一人、ブラディ君は、日本のアニメが大好きで、特に東京喰種や進撃の巨人が好きだと話していた。福島メンバーにも東京喰種を

好きなメンバーが数名おり、アニメの話で、かなり盛り上がった。アニメなど、日本の創造力は世界に大きな影響を与えていることを改めて知り、嬉しく思った。

【バタアン公立高校訪問】

バタアン公立高校に到着すると、昇降口で、私たち福島メンバーを音楽で迎えてくれた。ろうあ者の生徒が演奏し歓迎してくれた。見事な演奏で感動した。校舎3階の会場に向かったが、会場に行く途中でも踊りを披露してくれたり、合唱を披露してくれたり、驚くほどの歓迎をしてくださった。会場に行かないで、ゆっくり見たいなと思うほどだった。会場に着いた後も自己紹介の合間に音楽を挟むなどして、演奏や踊りがとても盛んだった。また、すべてのパフォーマンスの完成度が高く驚いた。言葉が通じなくても理解できる演奏や、踊りはとても重要なコミュニケーションツールだと思った。竹を使ったバンブーダンスでは、バタアン公立高校の生徒と一緒に踊った。丁寧な説明ですぐに踊ることができ、とても楽しい時間を過ごした。私たちの書道やよさこい、竹とんぼ紹介もスムーズに行うことができた。現地の方はどんなことに対しても、大きな歓声と拍手



バタアンユースメンバーと一緒に



交流の「よさこい踊り」

をくださってとても気持ち良かった。

【バランガマーケット見学（戦争資料見学等）】

バタアン公立高校との交流会終了後、バタアン支部職員の皆さん・バタアン支部ユースメンバーと一緒に、バランガマーケット見学へ行った。到着してすぐ、バタアン州の説明映像（観光案内等）を見せていただいた。バタアン半島は、マニラ湾を囲むように北側から突き出している半島であ

り、その先端部にコレヒドール島がある。どの海岸も美しく、今度は、マリンレジャーで訪れたいと思った。また、バタアン半島は、太平洋戦争が始まってすぐに、日本軍が米国統治下のフィリピン攻略を開始した場所でもあり、戦争に関する資料も多く展示されていた。そこには、戦争により一般の方々が悲惨な状況に追い込まれた様子の写真や絵があった。戦争の過ちを二度と繰り返してはならないと思った。



訪 問 日 誌

【5日目】 8月13日(木) 天候：晴れ 記録者：田代 美月、山口愛由美

●日 程

- 7：45 ホテル発
- 7：50 公設市場見学
- 9：00 サマット山戦争資料館見学
 ゼロポイントモニュメント見学
 フレンドシップタワー見学
- 12：00 支部職員・ユースメンバーとの昼食会
- 13：00 バタアン原発見学
- 15：40 支部職員とユースメンバーとお別れ会
- 21：30 夕食
- 22：10 本日のふりかえり・打合せ

●所 感

【サマット山・戦争資料館見学等】

サマット山の山頂に「勇者の廟」という十字型の大きな建物があり、ひときわ目を引いた。その高さは、100メートルを超えるそうである。日本軍とアメリカ軍・フィリピン軍混成軍との交戦で多くの犠牲者が出たそうだが、その慰霊のための十字架である。サマット山の山頂の十字架を見ると、戦争で多くの若者が命を落とした悲しみに心が痛んだ。戦争資料館には、戦争で使われた

銃や武器、戦争の写真、生々しい死体の写真などが展示してあった。戦争の悲惨さを改めて感じた。こうした戦争を二度と起こしてはならないと思った。サマット山から観る景色はとても美しいものだった。また、すばらしい晴天だった。美しい景色、美しい青空を見ていると余計に、戦争の悲惨さを思い物悲しい気持ちにもなった。



勇者の廟

【ゼロポイント・フレンドシップタワー】

私たちが、訪れたバタアン半島の中にバランガという町がある。この町の道の辻々には変わった道標があった。そこには兵士が人に銃を突きつけて今にも倒れそうなのに無理やり歩かせている姿や、地面に四つん這いになっている様子を描いた姿が鉄板の中に描かれていた。金属製のモニュメントで、何キロメートル地点と記されていた。これが「Death March（死の行進）」と呼ばれる有名なモニュメントである。そのモニュメントが造られた背景は次のようなことがあるそうである。戦時中（1941年）、バタアン半島のアメリカ軍・フィリピン軍の混成軍が日本軍に降伏しました。8万人の捕虜と2万6千人の避難民が日本軍の管理下に置かれた。日本軍は捕虜・避難民の後方移動を急がせ、バタアン半島南端のマリベレスからサンデルナンドまでの約100kmを徒歩で移動させた。この移動で多くの人々が死亡することになり、「バタアン死の行進」と呼ばれるようになった。このことは、日本軍の捕虜虐待の象徴としてアメリカでは大きな非難が巻き起こったそうである。捕虜たちは炎天下の100kmを歩かされることになったが、健康な人ならば水と食糧と適度な休息があれば炎天下といえども100kmの徒歩行進で死亡することはないだろう。しかし、10万人のうち1万人程度が死亡したそうである（正確な数は不明）。捕虜たちの多くが病人あるいは半病人であったこと、十分な水と食料が与えられなかったこと、および一部の日本軍兵士による虐待行為がこの死亡者数につながったと生き残った捕虜の方々は証言しているようだ。しかし、その証言は日本軍との記録と食い違っているところもあるようである。両国の主張の食い違いはあるが、異常なことであることは間違いないと思う。ゼロポイントの次に、フレンドシップタワーに行った。そこには、大きな鐘があり、祈りの言葉が刻まれていた。全員でお祈りをして戦争は絶対に起こして

はいけない、この戦争を忘れてはいけないと心に刻んだ。いつまでも、フィリピンと日本が友好的関係であり続けたいと願った。

【バタアン原子力発電所見学】

バタアン原子力発電所見学では、プロジェクトの年表・原子力計画など日本語に訳し、説明してくれた。専門用語や、原子力発電の仕組みを理解することができず、勉強不足を痛感した。原子力発電所内部の構造は複雑で迷路の様だった。原発内部は、とても湿気が多く汗が吹き出るように止まらなかった。原発内の設備は写真やイメージ画像でしか見たことがなかったので、実物の設備を見て、あまりに巨大な機械類に度肝を抜かれた。エネルギー問題、特に原発問題は、日本にとっても意見が二分する難しい問題である。今後のエネルギーをどうすべきか我々、若者も真剣に考えていく必要性を痛感した。



死の行進0kmポイント

【バタアンユースメンバー】

バタアン原発見学後、バタアン支部に戻り、そこでバタアン支部職員とユースメンバーとのお別れ会があった。2日間行動を共にしたバタアン支部の皆さんとのお別れは辛かったが、facebookで繋がることができると思うと、SNSの素晴らしい点を改めて感じた。2日間バタアンの方々と一緒にいて感じたのだが、戦争で多くの犠牲を出して

いるこの州の対日感情がとても良いのには驚いた。中国・韓国の反日デモに見られるような戦争を体験していない世代の反日感情のようなものが、この州では見られないような気がした。戦後の教育の違いだろうか。バタアンの人たちに、救われたような気持ちになった。



一度も稼働していないバタアン原発の前で



訪 問 日 誌

【6日目】8月14日(金) 天候: 晴れ 記録者: 小松 紗綾、高橋 里加

●日 程

- 7:50 ホテル発
- 8:10 ラス・ピニャス副支部訪問
 ラス・ピニャスユースメンバーとの
 交流
- 9:00 プラスチックリサイクル工場見学コ
 コヤシリサイクル施設見学)
- 12:00 ヴィリアーさんの自宅にて、ラス・
 ピニャス支部職員との昼食会
- 13:00 移動(渋滞に巻き込まれる)
- 15:30 モール オブ アジアで買い物
- 18:30 本社職員とのお別れ夕食会
- 21:00 本日のふりかえり・打合せ

●所 感

【赤十字ラス・ピニャス副支部訪問】

本格的な活動が最後の6日目。私たちはラス・ピニャス副支部を訪問した。支部のバルコニーのような場所でRCYのメンバーと対面した。福島メンバーとラス・ピニャスユースメンバーが交互に座り交流会が始まった。お互いの好きな歌手で話が盛り上がり、好きなメンバーや曲名を言

い合ったりした。交流会の回数も重ねてきたので、余裕を持ってフィリピンメンバーと向き合えた。ラス・ピニャス支部での交流会では、福島メンバーによる「日本・福島紹介」「福島県高校



ラス・ピニャス副支部にて

JRC活動紹介」「東日本大震災後のフィリピンからの支援に対する感謝の言葉」「東日本大震災とその後の福島県の復興」などを発表した。フィリピンメンバーは、真剣に耳を傾けてくれた。前日の夜にしっかり準備していたのでスムーズに進めることができ、満足のいく報告が出来た。

【リサイクル施設訪問】

ラス・ピニャスでは、仕事が無い人に働く場所を確保すること、環境保全という目的のもとリサイクルへの取り組みを進めているそうだ。リサイクル産業が盛んになると、①地域住民の安定した仕事になる。②老人や女性も参加できる。③材料は捨てられていたプラスチックやココナッツのため、資源の有効利用になる。④製品は土壌浸食防止など環境保全に繋がる。⑤地域住民のリサイクルへの意識が高まる。⑥地域のゴミが減少する。などのメリットがあると説明していただいた。回収したプラスチックのリサイクル施設訪問では、捨てられたペットボトルなどのプラスチックから学校で使用する椅子を作りラス・ピニャス市内の学校に寄贈しているそうである。その作業はすべて手作業でやっていると聞いてとても驚いた。1つのイスを作るのに40kgのプラスチックを使い、ごみを減らすことができるし、造る過程の中で火を使わないため環境に良いと思った。しかし、工場の近くを流れる川は黒く濁っており、工場のすぐ隣にごみが大量に積まれていたので衛生面に不安が残った。また、集めたプラスチックには、三



お母さんと一緒にリサイクル施設にいるフレニチカと

日目に訪問したパヤタスのゴミ山から集めたものも含んでいると聞いたときは、少し切なくなりました。ココナッツのリサイクル施設では、ココナッツの殻から山が崩れないようにする保護ネットや

ハンモックを造っていた。これはヴィリアさんという方のアイデアで、素材がココナッツなのでとても環境に良いことが分かった。市場などでもたくさん売られているココナッツは生産量も消費量も多いフィリピンにはぴったりのリサイクルであると思った。こちらのリサイクル施設でも全て手作業で造っていることと、3歳のフレンチカがハンドルを回してお母さんの手伝いをしていた。このリサイクル施設は、小さい子どもを持つお母さんでも子どもが仕事を手伝えるような環境だと分かり感動した。

【モール・オブ・アジア見学 お買い物】

6日目の午後は、モール・オブ・アジアに行った。そこは世界で3番目（1位中国 2位カナダ 3位フィリピン）に大きいモールである。すべての出入り口に、警備員がおり、セキュリティチェックをしなければ入れないという厳重さが、フィリピンの政治的な不安定さを感じた。ショッピングは、時間が少なくてゆっくりみることは出来なかったが、それでも福島メンバーはたくさんのお土産を購入していた。

【お別れ夕食会】

singing cooksという店員さんやコックさんが歌って踊ったりして多様なパフォーマンスを披露してくれるお店で、お別れ夕食会を開いて頂いた。店員さんたちの歌もダンスもとても上手でユーモアがあり、料理もとてもおいしかった。フィリピンでの最後の夜は、派遣中お世話になった、通訳のリンさん、赤十字本社のジャムさん、赤十字本社の若い職員の皆さんとのお別れの会であった。素敵なお店での会は、笑顔あふれる楽しい時間が過ごせた。フィリピン滞在中にお世話になった人たちとの最後の素敵な思い出となった。

訪 問 日 誌

【7日目】 8月15日(土) 天候: 晴れ 記録者: 箱崎 瑠依

●日 程

6:30 ホテルチェックアウト
7:00 マニラ国際空港到着
10:05 マニラ国際空港発 JAL746便
15:00 成田空港到着
16:00 成田空港 バス発
18:20 いわき湯本IC(いわき市)着
19:20 郡山駅前着
20:20 日本赤十字社福島県支部(福島市)着

●所 感

マニラ国際空港に向かう途中、いつもバスの中で携帯からの着信音が三味線だった運転手さんに日本のことが好きか訪ねたら「大好きだよ」と言われたときは、日本はとても愛されている国なんだと感じうれしくなった。お世話になったガイドのリンさんともお別れをした。一週間という短い時間だったが、リンさんがガイドでとてもよかった。マニラ国際空港の出発ロビーで、東京工業大学生と話をした。彼らは、私たちが、バタアン原発を見学した次の日に、原発を見学に行っらしく、私たちが見学したことを聞いたそうである。久しぶりに日本語で話したことに感動した。飛行機が飛び立つと眼下に、フィリピンのとても綺麗な街、自然の景色があった。貧富の差が激しいこの国も空から見ればとても美しい国だなと感じた。日本に、住んでいると便利で日本語だけで通することができるが、もっと世界に目を向けることが重要で、そのために英語を身に着けなければいけないことも再認識できた。たくさんの出会い、たくさんの思い出が、私の心にいつまでもあると思う。成田空港に着くと、もう最後なんだなと寂しくなった。とても優しくノリのいいフィリピン

の人達にたくさん巡り会え、交流できたのは、私のこれまでの人生、そしてこれからの人生にとって貴重な体験になった。英語での会話に関してはこの一週間でかなり鍛えられたと思う。ノートなどに書いて覚えるのも大事だが、英語圏の人達と実際に話し、コミュニケーションをとる経験のほうが大きく成長でき、百聞は一見に如かずというのを実感した。一週間過ごした福島のメンバーとは、移動のバスで交流会の様子などをはじめいろいろな話題で盛り上がり、仲良くなることができた。とても個性的なメンバーが多いグループだったが、皆の良さを知ることができ楽しかった。この一週間の経験を生かし、多くの人にフィリピンの現状を伝えるとともに自分に一体何ができるのか、何をすべきなのかということを考えて、生活していこうと思った。フィリピン研修のチャンスを私たちにくださった日本赤十字社福島県支部の皆様へ感謝の気持ちでいっぱいである。



マニラ空港前で

フィリピン派遣を通して

福島県立福島高等学校 2年 山口 愛由美

8月9日～8月15日まで、「平成27年度青少年赤十字国際交流事業フィリピン派遣」に参加した。JRC部に入部したところから、この事業のことは知っていたが、まさか自分が行けることになるとは思っていなかった。1年生からJRC部で多くのことを学んでいくうちに、もっと自分を成長させたいと思い応募することを決意した。初めての海外、初めての飛行機で不安なことばかりだったが、実際に行ってみると、学ぶことが多く、そして現地の方との交流が楽しく、あっという間に7日間が終わってしまった。

普段は国境を越えて他国の人々と話せる機会が少ないため、私はフィリピンでは積極的に話そうと思っていた。英語は苦手に通じない時もあったが、その時はその時で、ジェスチャーをしたり、紙に書いたりして思いを伝えた。フィリピンの方も一生懸命聞いてくださり、理解しようとしてくださった。会話が續くと本当に楽しくて、もっと知りたい！伝えたい！と思った。そして何よりも

この7日間で助けられたのが、「笑顔」である。フィリピンの方はいつも笑顔である。自分が困っているときに笑顔で話しかけられると安心する。笑顔で歓迎されると嬉しくなる。言葉が通じなくても、笑顔が持つ力はすごいと思った。

学校交流では、日本の文化を伝えるということで、書道パフォーマンスと名前を当て字で書きプレゼントするというものがあった。私は、小学生の頃から書道を習っていたため、その経験を活かせたらと思い、気持ちを込めて書いた。

名前を書いている時も、「きれい！」や「すごい！」など言ってくださり、書き終わると日本語で「ありがとう！」と言ってとても喜んでくださった。予定していた人数よりも、多くの人に名前を書いてあげることができ、少しでも日本の文化が広がればいいなと思った。

フィリピン赤十字本社をはじめとして、4つの支部を訪れ交流した。2013年に起きた大きな台風被害や、普段行っている活動を説明してくださった。日本では、JRCの活動を知っている人は限られていると思うが、フィリピンでは小さな子供から大人までがボランティアに積極的で、皆から愛されていることが分かった。私もJRCのメンバーの一員として誇りを持ち、福島県に貢献したい。

私が、今回の事業で一番心に残っていることがある。それは、パヤタス地区の訪問で、2000年に起こった不幸な事故に巻き込まれた一人の女性の言葉だ。「幸せを感じる時はどんな時ですか？」という質問への返答は、「考えてみたけど思いつかないな…」私はこれを聞いた時涙があふれた。自分たちがどれだけ恵まれているか、そして、今までの自分を振り返り、「簡単に弱音を吐いては



書道パフォーマンスで名前を漢字にした

いけない」と強く感じた。しかし、その後に女性は「家族といる時が一番の幸せ」と言っていた。父と母がいなければ、今の私はいない。家族がいることも当たり前ではないことをフィリピンに行き、気づかされた。家族に支えられていることに感謝したいと思う。

最後に、今回のフィリピン派遣では先生方、日本赤十字社福島県支部の皆様、通訳のリンさんなど多くの方に支えられ、一緒に行ったメンバー達と協力しながら、多くのことを学ぶことができた。この経験を忘れずに、これからも頑張っていきたい。



心に残ったパヤタス



フィリピンで学び考えたこと

学校法人福島成蹊学園福島成蹊高等学校 2年 小松 紗綾

7日間のフィリピンでの経験は、とても刺激的で今までの価値観が大きく変わるものだった。国境も言語も育ちも環境も習慣も風土も違う私たちがコミュニケーションを取り、互いの気持ちを伝え合うことが出来るのか。また、私は人とコミュニケーションを取るのも、英語も苦手なため会話が成り立つかととても不安だった。しかし、ジュニアレッドクロス ユースの方や現地の学生に自分は英語が苦手だと伝えると相手がゆっくり話してくれたり、ジェスチャーを加えて説明してくれたりしたお蔭で思っていた以上に話すことが出来た。言葉が理解出来なかったりした時には、直接紙に書いてもらったり、電子辞書に入力してもらったりして自分なりに工夫出来た。今まで当たり前にしてきた自分の思っていることを相手に伝

えることの大切さ、大変さ、伝わらない時のもどかしさをフィリピンに来て毎日感じていた。初めて自分の伝えたいことを伝えたり、相手の質問に答えることが出来た時の喜びは今でも忘れられない。

フィリピンの交通の面では、日本車が多く走っていて、ジープニーというタクシーも多く走っていた。また、信号機や標識がほとんどなく、車線



RYCのメンバーと

✂ フィリピンを訪問して(派遣団員所感)

はあってもスルーして6列で走っていて、車間距離は20センチもなかった。道路の交通渋滞も酷かったり、走っている車と車の間を歩行者が横切っていて、交通のルールが改善が必要だと感じた。改めて日本の交通ルールが徹底していることを実感出来た。しかし、驚いたことに私たちが7日間のフィリピンに滞在中に事故を目撃したことは一度もなく、フィリピンの人々の運転技術の高さには驚嘆した。

派遣4日目バタアン州を訪問した時に、5歳前後の女の子に「お花を買ってください」と腕をつかまれた。「マッチ売りの少女」を見てみたいで、私はお花の一本くらい買ってあげてもいいかなと思ったが、すぐに一緒に歩いていたユースの方に追いやられてしまった。花売りの子供たちにいくらせがまれても買わないでと最初に注意はあったが、私がなぜ?と尋ねると「子供たちのためにならない。」と言われた。それからも別の花売りの子供たちにせがまれたが、私が一本お花を買ってあげたところで彼らの生活は変わらない。たとえ、あり金全て渡しても彼らは救えない。結論として、今自分がすることはないと考え何もしなかった。この何も出来ないもどかしさ、悔しさは一生忘れられないと思う。

私は普段から時間にだらしなかったり、一日を適当にやり過ごすことが多かった。それゆえ、フィリピンに行ってから忘れ物をしそうになった

り、朝の集合時間に遅れそうになったことがあった。メンバーのフォローがなければ、大変な失敗に繋がる恐れがあり、自分自身が先見の力足りてないと感じることが度々あった。だから派遣メンバーがそれぞれ自分の夢を持ち、先見に基づいて最善を尽くす姿にいつも圧倒されていた。

この7日間で感じた人々の優しさ、温かさには本当に感動した。この経験を自分の将来に繋げ、多くの仲間にフィリピンで学んだこと、感じたことを伝えていき、みんなでこれからのフィリピンについて考えていきたい。いつか自分の夢を叶え、またフィリピンに行き、人々の幸せに貢献したいと強く思う。最後に、このような機会を与えてくださった日本赤十字の皆さん、7日間共に過ごした派遣メンバーや先生方、ユースの方々、出会えたすべての皆さんに心から感謝している。



バタアン原発前にて



富裕層の方の自宅にて招待昼食会

「フィリピン派遣を通して」

学校法人東稜学園福島東稜高等学校 2年 大木 信二

フィリピンでの7日間は毎日が初めての経験や学び、そして後悔や反省の日々だった。私はフィリピンに行く前、自己研修として、顧問の先生から借りた「神の子たち」というDVDを観た。そこには、ゴミ山から資源になるものを拾い、それを売って家族の生活費としている子どもたちの生き様が紹介されており、言葉にならない衝撃を受けた。事前研修の時に配られたフィリピンに関するものに目を通したり、ネットでフィリピンをキーワードにいくつか検索したりした。フィリピンは、甘いものが多いと聞いたのでもしかしたら、糖尿病が多いのではないかと興味本位でそのことについて調べたら、糖尿病はフィリピンの「国民病」ともいわれることを知った。自己研修は、充分とは胸を張って言えないし、英語の勉強等もあまりしていなかったのも、行く前日は不安で胸がいっぱいだった。今思えば、行く前から準備不足等の後悔が多々あった。

フィリピンの人達と本格的に交流した2日目は呼びかけにみんなが反応してくれたり、発表終了後積極的に話しをしに来てくれたりと、フィリピンの人たちの積極性に圧倒された。そしてフィリピン側の発表は一ヶ月前から練習を重ねていたこ

とを知った時には、自分達の練習不足を感じるとともに、自分の福島県のJRCの代表として参加しているという自覚が足りていなかったことを痛感した。2日目は、英語での会話はたじたじであまりうまくコミュニケーションを取ることができなかった。

しかし、3日目以降は2日目の反省を生かして、自分から積極的にコミュニケーションと取りに行くことを心がけた。なんとか英語での会話をすることができるようになった。聞き取れない時は紙に書いてもらったりなどして電子辞書で調べ、なんとか質問に答えたり、質問したりすることができた。まず、自分から話しかける姿勢が功を奏した。



バタアン支部でのRCYの人達と



交流品のJRCのワッペンを渡している

研修の中で、自分は3日目のパヤタスが一番心に残っている。パヤタスで活動しているNGOソルトパヤタスは日本人が中心となり活動しており、フィリピンの貧困の問題を解決するために頑張っていることが実感できた。ソルトの主な活動は、貧困で学校に行けない子どもたちへの奨学金や貧困で生活が苦しい家庭のお母さん方に、刺繍の仕事を提供しており、そういった活動が貧困解

消に繋がっていることを学んだ。家庭訪問では、親子に幸せを感じる時はいつか不幸を感じる時はいつかという研究テーマについての質問をした。幸せとを感じる時は、家族といる時、子どもの成長を感じる時、不幸とを感じる時は、夫や子ども2人が、出稼ぎに行っているの、なかなか会えないことであると答えてくださった。自分たちはこの家族に対して何ができるのか、貧困問題に対して何をすべきなのかということを考えさせられた。

この研修中で私が一番好きになった場所はバタアン州だ。第二次世界大戦時には、日本軍との激しい戦争があった場所であるが、今は、フレンドシップタワーなど日本との交友を示すものがたくさんあり、美しい景色がある。そして何よりも優しく面白い友達がたくさんできたからだ。これからも彼らとは、フェイスブック等を使って交流し

ていきたい。その交流を通して、フィリピン赤十字ユースボランティアの活動などを参考にし、自分たちの活動に生かしていこうと思う。

この短く、しかし密度の高い一週間での経験を活かし今後のJRCでの活動や日々の生活などに役立てるとともに、私が貧困問題に対してできることを考え、実行していきたい。



フィリピン派遣メンバー



フィリピン派遣報告 感想

学校法人松韻学園福島高等学校 3年 佐藤 佑樹

今回のフィリピン派遣ではたくさんの出会いと発見と驚きの連続だった。フィリピンに向けて出発した当初はこの先どんなことがあるのだろうという期待と不安が混じり合う気持ちでいっぱいだった。しかし、福島と同じような田んぼや畑に囲まれた生活を想像していたのに対し、それをはるかに超える高層ビルや住宅街の景色が広がっていたことに驚いた。現地の方々のとても積極的で明るい振る舞いに感動していると、不安な気持ちも消えとても楽しく過ごすことができた。

ソルト・パヤタスで訪問したゴミ山は、近くま

で行って見ても本当の山のように見えた。ゴミ山崩落事故で亡くなった慰霊碑を訪れた時、事故にあった家族のお母さんが当時の状況を話してくれた。内容がとても生々しく今でも思い出すほどだ。そして、これからの夢がありますかという質問に、涙を流し「いままで考えたことがなかったわ」と言っていた。本当の幸せとはなんだろう、どうすれば夢を持つことができるのだろう、改めて考えさせる時間だった。また、ゴミ山で生活する家庭を訪問する機会があった。家までの道には、やせ細った犬が鎖を付けずに放し飼いになっ

✂️ フィリピンを訪問して (派遣団員所感)

ていたり、異様な匂いが漂っていたりしていた。着いた家は、天井がとても低く、家というより小屋のような造りで、とても狭い空間の中で暮らしていた。このような場所で暮らしているのが正直驚きで私たち日本ははなんて豊かな生活を送っているのだろうと感じた。私が訪問した家庭は、母娘2人で父親とお兄ちゃんは出稼ぎでひと月に数回帰ってくる程度と聞いた。しかし、話を聴くと、とても暖かい家族で「貧しいけれど家族がいて幸せだ」と笑顔で言っていた。貧しくてもこんなにも笑顔でいられるのがとても羨ましいと思った。また、娘さんが将来の夢は数学の先生になることで一生懸命勉強していると聞いた時は日本では毎日学校に行き学ぶことに感謝しなければと思い、また夢を持つことが大事なのだとこの時改めて思った。



バタアンRCYの明るいメンバーと一緒に

フィリピン派遣すべての日程に感動がありましたが、特に、5日目のバタアン州の活動が印象的だった。5日目の朝食後すぐにバタアン朝市に行くことができた。市場に着くと、魚の生臭い匂いが全身を覆った。そんな市場で自分が欲しかったランニングシューズを買った。物産品などもたくさんありどれも欲しくてたまらなかった。次に「サマット メモリアル クロスタワー」に行っ

た。山の頂上に大きな十字架が刺さって見えて間近に見るととても美しく悠々しく見えた。太平洋戦争の時日本軍が現地の人に酷いことしたことを忘れないように、これからも平和でありますようにという意味を込めて建てられたらしい。次に「フレンド シップ タワー」に行った。日本から送られたものでこれも同じく、いつまでも平和でありますようにという意味を込めて、円の中心にお寺によくある大きな鐘があった。いつまでも平和であって欲しいなと思った。

午後からは、バタアン原発に行った。福島原発事故のこともありとても興味があるものだ。間近で見るととても大きな建物で威圧されるように感じた。バタアン原子力発電所見学では、プロジェクトの年表・原子力計画など日本語に訳し、説明してくれた。専門用語や、原子力発電の仕組みを理解することができず、勉強不足を痛感した。原子力発電所内部の構造は複雑で迷路の様だった。原発内部はとても湿気が多く汗が吹き出るように止まらなかった。原発内の設備は写真やイメージ画像でしか見たことがなかったので、実物の設備を見て、あまりに巨大な機械類に度肝を抜かれた。エネルギー問題、特に原発問題は、日本にとっても意見が二分する難しい問題だ。今後のエネルギーをどうすべきか我々、若者も真剣に考えていく必要性を痛感した。

見学後、バタアンの方々とのお別れ会があった。とても楽しく過ごすことができ、別れがとても切なかった。たった2日間でしたが強い絆が生まれた大切な時間だと思った。

次にバタアン州の夜に現地の人と一緒にコンビニを訪れた時のことだ。突然私の前に出てきた女の子が、花飾りをもって現地の言葉でなにかを言っている。初めはなにかを尋ねたいのかなと思ったが、実はその花飾りを買ってほしいと分

✂️ フィリピンを訪問して (派遣団員所感)

かった。私は買わなかったが、あの女の子は今も同じことをやっているのかと思うととても悲しい気持ちになる。世界にはあのような子ども達がいっぱいいるのだと考えるとますます悲しくどのようにすればいいのかとも考えてしまう。

同じ地球に住んで、同じ時間を過ごしているのにこんなにも違う世界があるなんて思いもしなかった。また、現地の方々とお食事をする際話することができなくて孤独感を感じた。そうならないためにも英語で話すことで相手と話することができ、もっと世界が広くなると思った。英語をもっと勉強したいと感じた。フィリピン派遣メンバー

や現地でお世話になった方々、そして、私たちを安全に案内してくれたガイドのリンさんにとても感謝している。本当にありがとうございました。



ココナッツリサイクルセンターにて



派遣報告

福島県立あさか開成高校 2年 高橋里加

私は今回のフィリピン派遣研修に参加することが決まり、嬉しさとともに多くの不安を抱えていた。初めての飛行機、初めての海外、何もかもが初めてで、ましてや福島県の代表として、東日本大震災での支援の御礼や福島の現状報告、国際理解・親善の促進をしなければならないという責任を感じていたためである。人見知りや英語に自信がなかった私は、特に国際理解・親善の目標に対し、フィリピンの方とうまくコミュニケーションをとることができるのかとても不安だった。

研修中、フィリピン赤十字本社、各支部訪問、小学校・高校訪問、パヤタス地区訪問、サマット山見学、バタアン原発見学、ラス・ピニヤス地区のリサイクル施設訪問を通して、青少年赤十字ボランティアの方々をはじめ、たくさんの方々との出会いがあった。

ケソン支部訪問では、日本メンバーに1人～3人程度のフィリピン青少年赤十字メンバーがパー

トナーとしてついて交流をした。ケソン支部でのパートナー、シーン (SHEENE) とは初めての交流だったため緊張していた。緊張の中でも精一杯の英語とジェスチャーで伝わった時は嬉しかった。うまく英語が出てこなかったり、英語が聞き取れなかった時には、シーンがゆっくり話してくれたり、単語を言ってくれてとても助かった。交流していくうちに緊張がとけてきて、最後に「笑顔がとてもいいわ」と言われた。うまく言葉が通じなくてもとにかく笑顔でいようと心がけていた私にはとても嬉しい言葉だった。もっと英語を勉強していればよかったと後悔したが、言葉が通じなくても、笑顔と相手に伝えようとする気持ちが大切なのだと感じた。バタアン支部のパートナー、メーベル (MABEL) とカーラ (CARLA) には日本語を教え、プレゼントを渡し、SNSのID交換をしてとても喜んでもらえた。2人からも手紙と共にブレスレットとポーチ、ペンをもらい、とて

✂️ フィリピンを訪問して (派遣団員所感)

も嬉しかった。交流も慣れてきて、会話が续くようになり、自分の気持ちを英語で表現することの楽しさを学んだ。もっと英語を勉強して、自由に言葉を表現できるようになりたいと強く感じた。また、派遣が決まった当時抱えていた不安もほとんどなくなり、今までは関わる前に自分で言葉の壁を作り、話そうとすることを諦めていたのだと気付いた。話しかけることですべてが始まる、まず話しかける勇気が大切なのだと学んだ。



ラス・ピニヤス副支部にて

学校訪問では、毎回1人1人の自己紹介の時間があった。タガログ語も交えながらの自己紹介はとても喜ばれ、しっかり伝わるように、丁寧にゆっくりと大きな声で言うように意識していた。フィリピンの方はリアクションが大きく、とてもノリがよかった。日本とは違ったフレンドリーな温かさがあり、自己紹介中でも言葉のキャッチボールができて伝わっているということを感じ、とても嬉しかった。フィリピンの学生の歌や踊りはどれも素晴らしく、キラキラと輝く笑顔からたくさんの思いが伝わってきた。笑顔は言葉を伝える時だけでなく、何かを伝えるとき力になってくれる「魔法」だと感じた。日本の発表もどれも喜

ばれ、私の担当のよさこいでは、フィリピンの生徒から学んだ最高の笑顔で踊ることができ、とても盛り上がった。発表後、「あなたは英語が話せる？」そんな切り口で話しかけられ、タガログ語どころか英語も上手に話せない私にたくさんの人が積極的に話しかけてくれて、驚くとともに嬉しかった。

私は今回の研修を通してフィリピン赤十字の活動を学び、本当にたくさんの人との出会いを通じて、お互いの友好関係を築くことができた。今後は赤十字活動の実践目標である「健康・安全」「奉仕」の活動に取り組むとともに、今回フィリピン派遣の目的でもあった「国際理解・親善」に取り組む意義やその必要性を多くの人に伝えていきたい。また、東日本大震災直後から今に至るまでにフィリピンが救援物資や救援金を支援してくれたことや、フィリピン台風30号被害に対して、日本がフィリピン支援に取り組んできたような、フィリピンと日本の協力体制の重要性を訴えていきたい。そして国境を越えて人と繋がるとき、言葉の壁を自分で作らず、話しかける勇気と笑顔、相手に伝えようとする強い気持ちをもつことが大切なのだと伝えたい。人と繋がりたいという強い気持ちがあれば、その気持ちは必ず相手に伝わり、自分に大きな影響を与えてくれる。人とのつながり



交流品のワッペンとバッジをつけて

の大切さを教えてくれたフィリピン派遣は私を大きく成長させてくれたように感じている。このような貴重な経験をさせてくださった日本赤十字社

福島県支部の方々はじめ先生方、フィリピンの
方々、共に学んだかけがえのない仲間感謝して
いる。



「フィリピンで過ごした7日間」

福島県立白河実業高等学校 3年 田代美月

私は、日本赤十字社福島県支部の震災復興事業の一環であるフィリピン派遣研修に、8月9日から8月15日までの7日間、県内のJRCメンバー7名でフィリピンを訪れた。この研修は、青少年赤十字の活動の実践目標のひとつである「国際理解・親善」を果たす目的も兼ねていた。

私は3年生になって校内のJRC委員会に所属し、県のリーダーシップ・トレーニングセンターに参加した。そこで、今回引率してくださった本宮高等学校の菅野勇一郎先生から「国際人道法」についてご教授を受け、コミュニケーションの難しさ、相手の気持ちを考え、同じ目線で話す大切さを学んだ。私は英語が苦手で、簡単な英単語しか話すことができず、言葉が通じない相手とコミュニケーションをはかることが出来るか不安であったが、身振り、手振り、アイコンタクトや笑顔を通して、コミュニケーションをとることができ、トレーニングセンターで学んだことを生かすことができた。

フィリピンで過ごした7日間を振り返ってみると、毎日新しい発見があり、自分の価値観が覆された。フィリピンに着いて最初に驚いたのは、交通量が多く、日本では考えられない程、車と車の距離感が近いことだった。ホテルに着くまでに事故が起きてしまうのではないかと飛行機より怖い思いをしたことを覚えている。

2日目は、フィリピンにあるファストフード店

Jollibeeで、フィリピン赤十字本社の職員の方やユースの方々と昼食を共にした。初めてフィリピンのお米を食べてみると、ポロポロしていて食べにくく、日本のお米が恋しくなるほどだった。



人気のあるドラえものの絵描き歌で使ったお面

3日目、パヤタス地区に行き、ゴミ崩落事故で亡くなった方の慰霊碑がある広場で、ゴミ山崩落事故の被災者、シェリーさんから貴重なお話を聞くことができた。当時住んでいた家は、崩落したゴミにより押し潰されてしまい、シェリーさんの息子ジョシュアくんはゴミに埋もれ、片腕を切断することになってしまった。10年たった今でも事故のことを鮮明に覚えており、心の傷は癒えないのだと感じた。ゴミ山が存在しなかったら、フィリピンに大きな格差がなかったら、このような事故は起きることはなかったのだと考え、胸が締め付けられる思いがした。

4日目、5日目は、バタアン支部の方とユースメンバーと共に過ごした。この2日間で、私たち

✂️ フィリピンを訪問して (派遣団員所感)

は学校訪問に加え、サマット山、メモリアルクロス、第2次大戦中に日本軍がフィリピン人に強いた、いわゆる「死の行進」のゼロポイントやフレンドシップタワーを訪れ、バタアン原発を見学した。今年は、多くの尊い命が犠牲となった太平洋戦争終結から70年を迎えるが、若い世代の人にとって戦争は遠い歴史の一部になってしまっている。私は戦争の展示物見学の際に、戦争で使った武器、生々しい死体の写真を目にし、改めて戦争の悲惨さを身に染みて感じた。

実質的に最後の活動となった6日目は、ラス・ピニャス支部で出会った高校生の女の子ファイサと仲良くなることができた。ファイサは、英語ができない私のために簡単な英単語を選んで話してくれ、好きな歌手が偶然一緒に話が盛り上がった。フィリピンに来てから福島県の紹介をする時間がなく、このまま報告することができないのかと心配していたが、報告する時間を作ることができた。福島県については、会津、中通り、浜通りの観光名所を紹介した。特に原発の問題を抱える浜通りについては、海の生き物と触れ合うことができるアクアマリンと、家族連れで賑わっているいわきの海を紹介した。いつの日か福島に来てほしいと伝え、私が紹介した鶴ヶ城や三春の滝桜などの観光名所を訪れ、四季折々楽しめる福島の有

名な果物を楽しみ、良い思い出を作ってほしいと話した。

フィリピンで過ごした7日間を振り返ると、日本では当たり前だと思っていたことがフィリピンでは当たり前ではなかったり、私の英語力が未熟だったり、と気づかされることばかりであったが、フィリピンの方々は、私たちを温かく迎え、家族のように接してくれた。そうしたフィリピンの方たちの優しさを知ると同時に、コミュニケーションを取ることの難しさや、環境が異なる海外では、臨機応変な行動が求められることを学んだ。これらの経験を、これからの青少年赤十字の活動に生かし、より良い活動にして行きたいと思った。そして、自分が伝えたいことや相手の質問に答えられる英語力を身に付け、近い将来、フィリピンで出会った人々に会いに行き、また交流したいと考えている。



通訳の方にいただいたブレスレッド



フィリピン赤十字本社にお別れのあいさつ

派遣報告

学校法人昌平饗東日本国際大学附属昌平高等学校 2年 箱 崎 瑠 衣

派遣前、私はフィリピンについては漠然とした「発展途上国」というイメージしかなかった。しかし、フィリピンの空港からホテルに向かうバスから見てみると、当初抱いていたイメージとは大きく異なり、大きな広告塔や電飾掲示板、ファッショナブルな外観の店舗などがたくさんあり、日本と変わらないと思った。しかしそれは、フィリピンの首都マニラの光景であり、その後の研修中訪れた他の地区ではマニラとは異なる景色が広がっていた。



マニラ郊外の路肩の風景

一見華やかで近代的なマニラ市街地でも大きなビルの谷間には、トタン屋根の、今にも壊れそうな家々が連なっていた。外で遊んでいる子供達の服装も、上半身、裸の子が多く、身につけていても、汚れていたり、傷んでいるものが多いようだった。スカートやズボンに穴が開き、足もとは、ビーチサンダルか裸足だ。私たちが歩いていると、1人の5、6歳の女の子が、花の首飾りを売りに近づいて来た。彼女たちはその売り上げで生活を営んでいる『ストリートチルドレン』だ。幼い子供が生計を立てるために働くということは、

通常日本では考えられないことで、彼女の生活を思うと、胸が痛んだ。

研修中、貧困の問題を考えさせられたのは、パヤタス地区の家庭を訪問した時だった。私の訪れた家の目の前に大きなゴミ山があった。家の中は電気・水道・ガスの設備はなかった。話を聞くと、生活に必要な物の大半はゴミ山から拾って生活しているということだ。家もあり合わせの資材を拾い集め、自分達で建てたそう。お父さんはゴミ山でリサイクルできるゴミを拾い、それを売ることによって生計を立てる『スカベンジャー』という、職に就いていた。子供は、ゴミの仕分けを手伝っているそう。しかし、稼ぎが少ないと夕食は食べられず、朝食がご飯とコーヒーだけの日もあるということだ。このような食生活の影響からか、子供たちの多くは、小柄で痩せており、腹部だけが膨らんでいる栄養失調状態であると思われた。

そうした貧しさに苦しむ人がある一方で、豊かな生活を築いている家庭もあった。それは、6日目のラス・ピニヤスの支部職員と昼食会で、ある事業家の方の自宅を訪問した時のことだ。自宅はとても敷地が広く、建物も近代的で立派で、敷地内にはファーストフードレストランやカフェなどもあった。自宅内に入ると、一見して高価な調度品や、事業展開しているココヤシのリサイクル商品なども多く飾られていた。そしてその先には、これまでの経歴を説明する展示品や、戦争のときの写真など、博物館のようだった。

7日間の研修において、フィリピン国内の貧富の差は大きく、一部の成功者と、その日の暮らしを何とかすることで精一杯の貧しい人たちが共存している社会であることがわかった。貧困の問題

は複雑でとても大きな問題だが、そのために私が
できることは小さなことかも知れないが、この研
修を通して自分が体験したことや感じたことを少
しでも多くの人たちと共有し、一緒に問題を考え
ていくことだと感じた。

フィリピン研修に参加する前は、不安もあった
が、出会ったフィリピンの方々の温かく、ユニー
クな人柄のおかげで楽しく、充実した時間を過ご
すことが出来た。



マニラ郊外の風景



フィリピン派遣の引率を終えて

福島県立本宮高等学校 青少年赤十字顧問 **菅 野 勇一郎**

【バナナと日本人】

フィリピンとの出会いは、私が教員になって間
もない23年前、県高校リーダーシップ・トレーニ
ングセンターにおいて「国際理解・親善」講座を
担当することになった時である。担当することが
決まってすぐ、本屋さんに向かった。出来るだけ
高校生にとって身近なテーマで“国際”を学んで
ほしいと考え書籍のタイトルを目で追っていたら
『バナナと日本人』という本を見つけた。『バナナ
と日本人』の著者は、特定非営利活動法人アジア
太平洋資料センター（南と北の人びとが対等・平
等に生きることのできる社会をつくることを目指
しているNPO）の設立のメンバーの鶴見良行氏
（1926年－1994年 日本のアジア学者・人類学者・
大学教授）である。内容は、日本向けバナナの最
大の供給先であるフィリピンに、アグリビジネス
のメジャーと言われる企業が次々と、資本、政略
を駆使して進出してきたこと。その中で、地元農
民は、借金が増え重なるシステムから逃れられ
ず、苦しい生活を強いられている現状であるこ
と。バナナプランテーションが引き起こしている

農薬による環境への悪影響、生産者の健康被害や
劣悪な労働条件などについて綿密に調査したこと
が述べられている。この本により、我が国でも南
北問題に対する関心が高まった。また、海外から
の食料に頼り切っている日本の在り方を考える契
機ともなった。リーダーシップ・トレーニングセ
ンター講座は『バナナと日本人』のポイントであ
る多国籍企業の暗躍、農園労働者の貧苦を中心に
紹介し、我々日本人が「価格」「栄養価」だけを
考える身勝手な消費者のままでいいのか？という
著者の問いについて、グループディスカッションを
行った。活発な意見が多く出され、さすが、JRC
メンバーと頼もしさを感じた。特に、「自分たち
の贅沢な暮らしが、途上国の人たちの苦痛の上に
成り立っていることに強いショックを受けた」と
声を詰まらせ述べていた生徒の言葉が今も忘れら
れない。では、現在のフィリピンはどのような状
況なのだろうか。特定非営利活動法人APLAとオ
ルター・トレード社が、共同でフィリピンバナナ
の調査にあたった。埼玉大学教養学部教授の市橋
秀夫氏や愛知学院大学経済学部教員の関根佳恵氏

フィリピンを訪問して (派遣団員所感)

などが、平成26年3月に開催された公開セミナー「『バナナと日本人』その後－私たちはいかにバナナと向き合うのか－」の中で、調査の報告をしている。①30年前とほぼ同じバナナ産地と国内流通の構造になっていること。②日本の輸入バナナの94.5%をフィリピン産が占め、フィリピンと日本の強固な関係性は変わらないこと。③日本のスーパーマーケットでは、「有機栽培バナナ」「フェアトレードバナナ」など選択肢が広がったことは事実であるが、バナナ貿易量の大部分を多国籍企業がコントロールしているなど従来のシステムとほとんど変わっていないこと。④元プランテーション労働者の話では、ノルマ達成のため翌朝まで残業する労働者、農薬で深刻な健康被害を受けた農園労働者の事例が確認されたこと。などが主な報告内容である。

(『バナナと日本人』その後、私たちはいかにバナナと向き合うのか？ 公開セミナー報告書<http://altertrade.jp/download/bananaseminar20140316.pdf> から引用)

【フィリピン研修プログラムについて】

今年度のフィリピン派遣のプログラムもよく練られたものである。主な学習テーマとその内容を学ぶ場については、表にまとめた。

様々な問題を世界的視野で見えてきた日本赤十字社福島県支部ならではの研修内容である。この研修を機会に、フィリピン派遣メンバーが、学ぶべき内容のキーワードは、「国際交流」「平和」「格差」「環境」「エネルギー」である。日本国内でも、毎日のように、ニュースで取り上げられる内容ばかり

主な学習テーマ	学習した主な場所	備考
フィリピン赤十字の活動 ユースボランティアの活動	本社	第2日目
	マニラ支部	第2日目
	ケソン支部	第3日目
	バタアン支部	第4日目
	ラス・ピニャス支部	第6日目
平和学習	サマット山	第5日目
	バタアン戦争資料館	第5日目
	バラング戦争資料展示室	第4日目
	死の行進ゼロポイント	第5日目
	フレンドシップタワー	第5日目
教育の重要性について	バヤタス	第3日目
	交流会を実施した学校（特に、バタアン公立学校）	学校訪問時
格差社会について	バヤタス	第3日目
	マイクロバスで移動中（車窓から）	全日程
	目的地に徒歩で向かうとき	全日程
	ヴィリアーさん（大富豪）自宅に招待	第6日目
エネルギー問題	バタアン原発	第5日目
環境問題	ラス・ピニャス プラスチックリサイクル施設	第6日目
	ラス・ピニャス ココナッツリサイクル施設	第6日目
国際理解・国際交流 プレゼンテーション力	マニエル高校	第2日目
	パン・パンガコ小学校	第3日目
	バタアン公立高校	第4日目
コミュニケーション力	すべての場所	全日程
先見・VS	すべての場所	全日程

りであり、今の高校生が、主体的に考え、行動しなければならない問題である。今年度のフィリピン派遣メンバーは、この研修を契機に地球規模の視点に立ち、これら難問に怯むことなく考え、実行していくことが期待されている。本報告では、私が派遣メンバーと共に学んだことを上記のキーワードをもとに報告していきたい。

【国際理解・国際交流で大切なこと】

国際交流において、大切なことは、①私たちは、いつも世界の国々とのつながりの中で生活しており、海外の人々やその国のことについて正しく理解する方法を学ぶことで、その後の国際交流、国際支援につながっていくこと。②国際交流の中で一番大切なのは「広い心」であり、「広い心」には親切な態度や相手を尊敬する気持ちも含まれること。③本当の国際交流というのは、『日本人』が『外国人』に触れるのではなく、『人間』と『人間』が触れ合うものであることを理解すること。④国籍、文化、宗教、職業、年齢、各人の個性など、数え切れないほどの多様性を、そのまま受け入れ、尊重すること。世界には様々な考え方があり、自分とは違う価値観で生きている人々が多い。みんな違ってあたりまえ。まずは、相手の意見に耳を傾け、互いの気持ちを共有することを大切にすること。参加メンバーは、以上の点を理解し、「国と国の信頼関係は、一人一人の人間関係から」を具現化していた。頼もしい若者達である。

【教育は子どもの自己肯定感を高めること】

マニユエル高校（2日目）・パン・パンガコ小学校（3日目）・バタアン公立高校（4日目）と3つの学校において交流会を実施した。どの学校も、私たちを温かく、楽しい企画で、大歓迎してくれた。全ての学校の出し物の完成度が高く驚き

の連続であった。スラムに立地していたパン・パンガコ小学校の合唱、ダンスのクオリティにも感動し、パン・パンガコ小学校の先生に尋ねた。（ガイドのリンさんに通訳をお願いした）「なぜ、子どもたちは、こんなにも歌やダンスが上手なのか？」答えは、「歌やダンスを重要なカリキュラムと考えている。なぜなら、自宅でも練習できるし、一日一日上達するので、褒めることができる。そのことで、子どもに自信が付き、自己肯定感が高くなり、算数や英語など他の学習にも前向きに取り組むようになる。」と説明してくれた。我々、日本の教員は、日本の生徒、学生の自己肯定感が他国と比較すると著しく低いという統計結果を事ある毎に見せられる。確かに、教育を考える上で重要な指標であることは間違いない。



バタアン公立高校 ダンスと楽器演奏

自己肯定感が低いと、自分を信じにくくなり自信がない状態になる、自信が持てないと何かに挑戦することも少なくなるという悪循環が生まれやすい。パン・パンガコ小学校の先生の一言は、私自身が、教育のあり方や学ぶ子どもを中心に教育を考えていく必要性について問われているように感じた。教員として、この問題を常に自問自答し意識していかななくてはならない。平等と公平のバランスを考慮すること。その子に、自分は誰とも

入れ替わることが出来ないかけがえのない一人の人間なのだと分かってもらうこと。恐れなくて、まず、1人の生徒からはじめること。学ぶことは、本当は楽しいことなど、国が違っても大人が子どもに伝えるべき大切なことは同じものだろう。

【ドラえもん学】

福島メンバーが、フィリピンの学校との交流会として、準備したものは、「書道」「ドラえもん絵描き唄」「日本伝統的な遊びの紹介」「よさこい」であった。どの企画も喜んでもらえた。特に福島高校の山口さんの書道には、全員が前のめりで、筆先の一点を注視していた。自分の名前を当て字で書いてもらった生徒は、どこか誇らしげだった。よさこいもメンバーの踊りが揃い見事であった。また、ドラえもん絵描き唄も大いに盛り上がった。改めて、ドラえもんの力に感服した。フィリピン派遣事前研修で、ドラえもん絵描き唄の英語版の歌詞があることを知り驚かされた。自宅に帰ってから、書棚から以前購入した『ドラえもん学』を読み返した。一部紹介したい。“経済的な豊かさを背景に、1980年代に入ると多くの日本人が海外旅行を楽しむ時代になった。そして海外に出かけた人びとやマスコミの特派員から、とくにアジア

の国々で「ドラえもんを見かけた」という話が伝えられたり、ドラえもんに関する記事を読む機会がふえた。その後も、ドラえもんのマンガやアニメはアジアの国々に広く深く浸透し、アジアの多くの子どもたちを魅了しつづけている。ほかのキャラクターとは違って、ドラえもんは息の長いヒーローであり、アイドルである。豊かで平和な日常生活を映し出し、ひみつ道具で夢をかなえるドラえもんは日本の若者だけでなく、アジアの若者の夢となりつつある。ドラえもんは日本の戦前の暗いイメージを払拭し、アジアとの友好関係を築くことに苦慮している大人たちを尻目に、草の根レベルで多くの友人をつくることに成功した。ドラえもんこそ、戦後のアジアに派遣された親善大使でもっとも実り多い成果を上げた存在ではないだろうか。”(横山泰行(富山大学教育学部名誉教授)『ドラえもん学』PHP研究所 PHP新書 第2章「マンガ世紀」のドラえもん II ドラえもん、日本から世界へ 最強の親善大使106ページから引用) 福島メンバーがプレゼントしたドラえもんのお面を受け取ったフィリピンの子どもたちの眩しい笑顔が、ドラえもんの偉大さを物語っていた。

【バスの中において】

福島メンバーは、バスの中でも学ぶ意欲が旺盛であった。バスの中は、「国際交流の場」「外国語学習の場」「文化人類学を学ぶ場」「活動後の主体的なふりかえりの場」「ゼミの雰囲気漂う学びの場」とその役割を次々と変えていった。第4日目から第5日目のバタアン州での研修では、バスにユースメンバーが数名乗車した。日本のアニメやアーティストの話で盛り上がったり、手遊び歌「グーチョキパーで何作ろう」を日本語で紹介したり、フィリピンユースメンバーと一緒に合唱し



パン・パンガコ小学校の生徒へドラえもんお面贈呈

たり、バタアン支部の若い男性職員が、日本アニメの主題歌を披露してくれたりと楽しい交流の場になった。フィリピンの学校での交流会前には、ガイドのリンさんからフィリピン語の学習タイムがあった。また、リンさんからは、「フィリピン人の気質」「フィリピンの地質」「平均的なフィリピン人の生活」「スラムの現状」など、幅広い内容について教えていただいた。

フィリピン研修も終盤に差し掛かった頃、福島メンバーのみで、話し合っていた。メンバーの会話からワクワクする内容が聞こえてきた。フィリピン人の運転は荒っぽいこと、車線変更も強引に割り込むのが当たり前なこと、車両間隔スレスレで見ていてハラハラすることなど、フィリピン人の自動車運転についての話である。私は、福島メンバーの会話を咄嗟にメモした。以下、メモに記載した内容である。「でも、フィリピンに来て一週間ほど経つけど、まだ一度も事故現場を見ていないよね。」「確かに不思議」「日本だったら一週間もバスに乗っていたら、一度や二度は、交通事故の現場を目にするよね」「信号や道路標識も少ない気がする」「なんかすごい。なんでだろう?。」「決まりが少ないから運転手一人ひとりが気を付けているのだと思う」「日本は決まりが多すぎて、逆に事故が増えるのだと思う」「日本は決まりを守っていれば大丈夫という気持ちが強すぎるのだと思う」「フィリピンの人は、自分のことは自分で守る気持ちが強いのだと思う。」この人たちは、法学部のゼミの一員かしら?と思うほどの見事な会話である。同じ社会規範としての法とそれ以外の道德などとの違いはどこにあるのかについて、大学のゼミで討議している雰囲気であった。学ぶとは、こういうことなのだとしみじみ思いうれしい心持になった。

【非人道的な行為である戦争の惨さについて学ぶ】

4日目から5日目は、太平洋戦争が始まってすぐに、日本軍が米国統治下のフィリピン攻略を開始したバタアン半島での研修であった。この地には、戦争に関する資料も多く展示されていた。サマット山の山頂に「勇者の廟」という100メートルを超える十字型の大きな建物があり、ひときわ目を引いた。日本軍とアメリカ軍・フィリピン軍混成軍との交戦で多くの犠牲者が出たが、その慰霊のための十字架である。「勇者の廟」の下には、戦争資料館があり、そこには、日本軍とアメリカ軍の兵器や遺品、戦争の写真が展示されていた。バタアン半島で繰り広げられた日米軍の激しい戦いの様子が地図などを使って詳しく説明してあった。その資料と日本で調べた内容には、食い違っているところも多々あった。加害者と被害者の主張は常に食い違うということだろう。

バランガマーケットとサマット山にある戦争資料館の戦争写真、日本兵の残酷さが描かれた絵画を観るとなぜ、人間はこんなにも非人道的な行為ができるのか?心がチクチクと痛んだ。そして、一ヶ月前に福島フォーラムで観たミシェル・アザナヴィシウス監督『あの日の声を探して』の青年ロシア兵が日に日に、人の心を失っていく姿が何度も頭の中を巡った。この映画は、1999年に始まった第二次チェチェン戦争をめぐる物語である。チェチェンはロシアからの激しい攻撃にさらされた。モスクワで起こったテロをチェチェン独立派の犯行と断定、対テロ作戦の名目で侵攻を開始した。その戦争でチェチェンの民間人20万人が犠牲になった。主人公は、チェチェンのハジ（9歳）両親を銃殺されたショックで声を失ってしまう。ハジは、姉も銃殺されたと思い、まだ、赤ん坊の弟を見知らぬ人の家の前に捨て一人放浪する。彼のような子どもさえもロシア軍は容赦なく攻撃し

✂️ フィリピンを訪問して(派遣団員所感)

ていた。だが、そんなロシア兵たちも初めは普通の青年だった。音楽と自由を謳歌していたローリャ（ロシア人）も異常な訓練で人の心を失っていく、被害者・加害者の両側の苦悩を描く物語である。私には、どうしてもJRCメンバーに伝えたいこの映画の解説がある。瀬谷ルミ子氏（認定NPO法人日本紛争予防センター理事長）の解説である。「この映画では、個人が暴力に向かってしまうプロセスが描かれていたことも印象的でした。まだ幼さ残る普通の少年だったコーリャは、軍隊の支配構造に飲み込まれて暴力を行使するようになります。何かおかしいとわかっているのに、それに対してノーと言えない環境に置かれ、やがてそのどす黒い感情のはけ口が他者への暴力になってしまいます。不満や不安をうまく解消する選択肢がないと、しわ寄せに弱者が犠牲になりやすい。この負の連鎖は、軍隊に限らず、難民キャンプのような紛争犠牲者のヒエラルキーの中でも、家庭内でも起こりえます。さらに言うと、貧しさや将来的な不安を誰かのせいにしたい気持ちが生まれた時に「君は悪くない。あの民族のせいだから一緒に倒そう」と突きつけられ、その規模が拡大すると紛争になる。ごく普通の一個人の中で暴力がどういう過程で発生していくのか？それもこの映画は見せてくれました。」以上が、解説の一部である。（『あの日の声を探して』パンフレットコラム「世界にはまだ、姿すら見えない大勢のハジがいる。」瀬谷ルミ子氏（認定NPO法人日本紛争予防センター理事長）から引用。）この映画のもう一人の主人公は、自分の無力さに絶望するEU人権委員会に勤めるキャロル（フランス人）である。彼女の苦悩から国際支援の難しさの一面が理解できた。支援現場には、赤十字の旗がひるがえっている。ぜひ、JRCメンバーには観てほしい映画である。

第二次世界大戦後のフィリピンは平和になったのか、残念ながらミンダナオ島では、1970年代からつい最近まで内戦が続いた。フィリピンから分離独立を目指すモロ・イスラム解放戦線軍と政府軍との内戦である。この内戦は、ムスリムが不当な扱いを受けている不満といつまでも貧困から抜け出せないという憤りが争いの大きな要因であるようだ。この内戦で、12万人以上が命を落とし、約200万の人が難民となった。しかし、昨年うれしいニュースがあった。2014年3月下旬、産経新聞に「ミンダナオ包括和平 フィリピン政府調印 イスラム武装勢力と」という見出しが躍っていた。記事は、“フィリピン政府は27日、南部ミンダナオ島で40年以上にわたり武力衝突を繰り返してきたイスラム武装勢力の最大組織、モロ・イスラム解放戦線（MILF）と、包括和平合意書に調印した。MILFは武装解除を進める一方、政府は2016年のイスラム系住民らによる新自治政府樹立を目指す。約12万人が犠牲となったミンダナオ紛争は和平への大きな節目を迎えた。”という内容



バランガ戦争資料展示室にあった絵

であった。フィリピンで最も貧困率が高いミンダナオ島にも一筋の光が射してきたと感じた。

【学び続けるパヤタスの女性】

フィリピンにはミンダナオ島以外にも貧困率が高い地区が少なくない。その一つがパヤタスである。マニラ首都圏ケソン市の中心部から、バスで約30分である。派遣前には、人里離れた場所にあるのだろうと予想していたが、意外と市街地の近くにあるのに驚いた。パヤタスはゴミ山で有名になってしまった。そのゴミ山の広さは、30ヘクタール。約2,000人がゴミ拾いをしているそうである。1995年に閉鎖されたスモーキーマウンテンの住民の多くが移ったとも言われている。パヤタスでは、はじめにソルトの活動についての説明をしていた。その後、崩落事故で亡くなった方々の慰霊碑の前で、被災者であるシェリーさんのお話を聞いた。具体的な話から崩落の悲惨な様子が伝わってきた。慰霊碑に献花した後に、パヤタス地区を散策した。狭い路地なので、どうしても住民の家の中が見えてしまう。午後2時頃の暑い時間帯だからだろうか父親が横になっている姿が目立った。スカベンジャーとして働く彼らは、比較的すずしい時間帯の朝方と夕方にゴミ拾いするそうだ。成人男性の多くが、日中、家で横になっていることに少し違和感があった。しかし、それは、怠惰ではない。彼らも朝から夕方まで普通の仕事をしたと望んでいるが、残念ながら仕事が無いという現状なのである。散策の後、ルビーさんの自宅を訪問した。ルビーさんの家は、とても小さく廃材で四方を囲っている風であった。ルビーさん家族は、フィリピンの内戦から、家族の命を守るため、生まれ育った田舎の家、田畑を売り、パヤタスに来たそうだ。家や田畑は、足元をみられ、とても安く買い叩かれたが、紛争に巻き込まれな

いよう、逃げるようにマニラに来た。マニラに来てすぐは、まずまずの生活ができていたが、父親の仕事がなくなると食べていくことさえも厳しい生活になり、パヤタスに来ることになってしまった。現在、父親は建築現場に出稼ぎ行っている。そこでも、毎月フルで働くことを希望しているが、仕事があるのは、月の3分に1程度だそうだ。働き手が求める仕事量に比べて実際の仕事量が大幅に少ないことが、貧困から抜け出せない要因となっている。完全雇用を目指すことが国家の一番の責務であることを改めて痛感した。厳しいパヤタスの現実を知り重い心持ちになったが、ある一筋の光も感じる事が出来た。ルビーさんの娘、プリンセスさん（中学1年生）が、将来は、「数学の教師になりたい」と夢を話してくれたとき、本人とお母さんの表情が明るくなった瞬間である。子どもが夢を語る時間が、家族に未来への希望を抱かせてくれることを感じた。

パヤタスでの研修の最後に、パヤタス生まれ、パヤタス育ちのビッキーさんとミゼットさんの次のようなお話で研修が締めくくられた。「皆さんには、パヤタスの現状、生の姿を見てもらった。日本との違いを理解してもらえたと思う。また、フィリピンも頑張っていることも理解してほしい。貧困を知り、どう解決していくかは、簡単なことではない。しかし、貧困を無くそうと、1人1人、自分ができることをやっていくことが、一つの解決策である。自分のため、家のため、コミュニティのため学ぼう。学び続けよう。という気持ちは何よりも大切である。」「政府、大企業に頼るのでなく、貧しくても自分ができることをやる事が重要。自分のこと、自分はなんでこうなのだろうと考えることが大切。貧困は、私たちの頭の中にあるもの。なんとかできる、無くせるという気持ちを持つことが重要。人を尊敬すること、

他の人を尊重することが、人間にとって、とても大切。」という話であった。パヤタスの女性が日々学び続けていることが理解できた。それと同時に、内容の素晴らしさに感動した。まるで、アジアで初めてノーベル経済学賞を受賞したセン博士が提唱するこれからの世界像についてまとめた『貧困の克服』（アマルティア・セン著 大石りら訳 集英社新書0127A）を要約したような話であった。



ソルトパヤタスの皆さんと一緒に記念写真

【格差問題について】

私が旅行で一番好きなことは、その街をゆっくり歩くことである。家々から聞こえてくる声、家事の音、土地の人が働いている姿、街の匂いなど、その土地に住む人々の生活を感じられるからだ。今回の研修では、3日目のパヤタス地区、6日目のラス・ピニヤスの街を歩くことができた。その時が、一番フィリピンを肌で感じる事が出来た時間であった。フィリピンの格差を一番実感したのは、6日目である。午前中に、ラス・ピニヤス支部を訪問し、ラス・ピニヤス イーストナショナルハイスクールの生徒と福島メンバーの交流が行われた。その後、歩いて、プラスチックリサイクル工場、ココヤシリサイクル施設を見学した。ラス・ピニヤスの家々は、パヤタス地区の家より

造りはしっかりしているものの、困窮した生活を想像させられるものであった。家の壁は、トタン、看板の再利用、サイズのまちまちな板でパッチワークのようになっていた。窓はあるもののガラスは入っていない、台所には、薪が燃えていた。ラス・ピニヤスの一般的な人たちの生活を見た後、すぐに、夫婦で上院議員を務めるヴィリアーさんの自宅に招待していただき、昼食をご馳走になった。美味しい料理をありがたくいただいたが、ついさっきまで、ラス・ピニヤスの細い路地から一般的なフィリピンの方の生活を見ていたので、目の前にある豪華な建物と贅沢な食事に、戸惑いも感じた。富を手に入れた人の状況、その日その日の生活がやっという人の状況を目の当たりにすると、所得格差の拮据りは、やはりやり切れない。世界銀行が昨年発表した各国のジニ係数^{*}により、デンマーク24%、スウェーデン25%、ノルウェー25.8%と北欧の国々の所得格差の小さいことが分かる。一方、フィリピンは43%と所得格差の大きさがこの指標からも分かる。無論、フィリピンだけの問題ではない。今、世界では、富の集中、貧困層の拡大が進んでいる。ジニ係数38.1%の日本も他人事ではない。ソルトパヤタス事務局長、小川恵美子氏の講話の中に、「日本人の約6人に1人が相対的な貧困層に分類される日本人にも格差が拡大している。日本でも危うい立場にいるということを感じる人も少なくないと思う。私が、現地の人と交わり活動する中で、フィリピンの人たちが抱える問題と日本国内の問題は同じことに気付かされ、世界はつながっていることを強く感じる」という話があった。とても示唆に富む内容であった。また、冒頭で紹介した『バナナと日本人』その後、私たちはいかにバナナと向き合うのか？公開セミナー報告書で、愛知学院大学経済学部教員の関根佳恵氏が、“フィリピンでは生産者が土

地を追われて貧困化している状況がある一方で、日本でも貧困問題、ホームレス、所得格差、就職難などいろんな問題が発生しています。グローバル資本主義、新自由主義的な政策が席卷している社会において、我々が直面している問題は、実は根っここの部分でつながっていることを考えるきっかけに^{*}バラゴンバナナはなと思っています。”という報告内容は、小川事務局長の話とぴったり重なる。日本人も格差問題に真剣に向き合い、改善のための行動が、今、求められている。

※ジニ係数とは貧富の格差を測る指標

分布が平等であれば0に近づき、不平等であれば1に近づく値の大きさが不平等度を測る指標として用いられる。

※バラゴンバナナ

大企業が介在せずに安全なバナナがほしい消費者と安定した暮らし・安全な労働環境を守りたい生産者の願いを実現させたシステムのバナナ。

【ピープル・パワーと赤十字パワー】

人間が本来持っている生き抜く力の強さをフィリピンの人々から感じた。パヤタスでは、電化製品が無い、家の中にトイレや風呂が無い、料理は薪を火力とする。戦後の日本人にとっては驚くほどのことではないだろうが、現代の日本人には、信じられない生活だろう。でも、パヤタスの女性からは、大きな笑い声が聞こえてきたし、道端には、元気に遊ぶ子どもの姿が多く見られた。マニラの中心部の片側4車線のロハス大通りには、道幅いっぱい車が並んで走るので、5車線にも6車線にもなる。その道路の真ん中に水を売っている男性を数人見た。水を売る男性スレスレに自動車、トラックが走る。水を売る男性の逞しさには感服する。リチャード・カールソン著『小さいことにくよくよするな！』に私が、一番気に入っている文章がある“人生は不公平だという事実を認めると、自分を気の毒がらずにすむようになり、

いまもっているものを最高にいかそうと自分を奮いたたせるようになる”この文章は、フィリピンの人たちの根底にあるものと通じていると感じた。フィリピンのどこの街を訪れても広場などで、多くの人が集まっている。みんなで何かしようという連帯感だろう。さすが、多くの人々を巻き込んだ反核への運動「非核バタアン運動」や革命を人民の力で成し遂げた国である。

福島メンバーの移動には、赤十字マークが貼ってあるマイクロバスが使われた。どこにいても我々のバスは便宜を受けた。進入禁止のところも、「レッドクロスならOK！」と笑顔で迎え入れてくれた。「赤十字ってすごい！」福島メンバーの一人が言った。「赤十字は、おそらく、世界で最も認められ、喜んで迎えられているシンボルである。赤十字は、人々が本当に必要としている時に、絶えまぬ活力と信頼に足る援助を与えてくれるシンボルである。人間の、人類は兄弟という変わらぬ願いの象徴である。」というジョン・F・ケネディーの赤十字思想誕生100周年記念に向けたメッセージが頭に浮かんだ。フィリピンの地でも赤十字の信頼の高さと政治的な力ではなく、民衆の善意と良識を味方に獲得した赤十字の力を実感できた。

【変わるために、今、やるべきこと！】

ハーバード大学教授スティーブン・ピンカーは、著書『私たちの本性に潜む より良き天使』(2011年)の中で、戦争の廃絶は、人類の悲願であるが、現実社会はそれをいまだ実現できていない。現代の国際社会は、一発触発の武力紛争の危機が世界中を覆っている。しかし、人間は、歴史から、失敗から、多くのことを学んできた。人類史上、今が最も平和な時である。現在は、社会的に許される暴力が、明らかに減ってきている。ヨーロッパ

フィリピンを訪問して(派遣団員所感)

の殺人発生率は、中世と比較すると、1/100に減少したと統計データをもとに主張している。人の命を重んじる教育が、世界各国に広がったこと。人間は他者に共感できる生き物であり、相互依存が高まり、利己心が抑制され、どんどん人の輪が広がっていると世界が平和になった要因を挙げている。また、同氏は、「貧困率」は、ゆっくりであるが、確実に低下し貧困の終焉に向かっていと述べている。私もピンカー氏と同じ意見である。人間は、失敗を重ねながらも一步一步、理想のあるべき姿に近づいていると思う。では、私達は、どう行動していくべきか、自分がやるべきことを一つ一つ確実に実践していくことが必要であろう。例えば、フェア・トレードをさらに推進していくことなどが考えられる。フェア・トレードによって、流通過程を現地の人たちが取り戻し、日本の生協運動などと結びつき、途上国の労働者が、「正当な」対価を安定して手に入れられるようにしていくことが必要である。また、フェア・トレードは、日本人にとっても「援助」とい

う形ではない対等な形において彼らの生活向上の役に立つことができると同時に、途上国の人たちの頑張りや活力というものを感じ取ることができるだろう。パヤタスのビッキーさんとミゼットさんが話していたように、学び続けること、他の人を尊重すること、一人一人が、決してあきらめないことで、世界はきっと変わっていくだろう。フィリピン派遣の引率を終えて、自分自身に、世界が変わるための実践者の一員となることを誓った。



ケソン支部でユースメンバーとの記念写真



フィリピン派遣に参加して

日本赤十字社福島県支部 社員係長 小林 俊之

8月9日から15日までの7日間、支部復興支援事業である青少年赤十字国際交流事業「フィリピン派遣」に支部職員として随行した。

「フィリピン派遣」の大きな目的として福島県と現地のJRCメンバーとの交流による「国際理解・親善」が挙げられる。また、福島県支部の復興支援事業がフィリピンをはじめとした海外赤十字社からの救援金で行われていることへの感謝と復興の現状を海外の方々に伝えることも重要な使命だった。今回派遣された高校生メンバーは限ら

れた時間であったと思うが、事前研修の段階から全員が積極的に意見を出し合い、より良い活動が出来るように準備を進めていた。その姿に私たち職員も期待をもって、無事に活動できるよう出発に備えた。

今回の派遣は、フィリピン赤十字社および支部の訪問、各地の学校での児童・生徒たちとの交流会、ソルトパヤタスで暮らす方々の訪問やバタアン原発の見学などの充実したプログラムで、随行した私たちも新たな発見が多く、大変勉強になっ



採血室（フィリピン赤十字本社）

た。その中で印象に残ったことを報告する。

1日目は移動に費やし、マニラ国際空港に着いたのは午後11時だった。ホテルに到着し、打合せが済んだ頃には日付が変わっていたが、2日目の朝から本格的な活動が始まった。最初の訪問先であるフィリピン赤十字社本社は新社屋での業務が2週間前に始まったばかりとのことで、荷物の移動もまだ終わっていない状況だった。そのような中、2013年のフィリピン台風での活動報告や緊急車両（消防車）、血液センター、司令室などの見学、そしてフィリピン赤十字社のチェアマンも忙しい業務の合間を縫ってお会いいただくなど、皆さんが丁寧に対応いただいた。建物は日赤本社と比べるとかなりコンパクトな建物だが、各部門で職員が業務をこなしていた。私は以前、血液センター勤務だったので、献血部門に興味があり、そこを注目しながら見学に同行した。担当職員の案内で献血の各部署を見学したが、1階には献血受付と検査・製剤・供給室、2階には問診室（医師が常駐。日本と同様でガラス戸で仕切られている。）と採血室、事務所が配置されていた。見学時は受付で献血希望者が待機していたが、採血中の方はいなかったのが様子が見られず残念だった。受付を通り、2階を見学したが、採血室の中

は全血採血と成分献血に分かれていた。全血採血の部屋にはベッド（電動ではなくリクライニングできない）が並んでいたが、採血機器は備え付けられていなかった。一方、成分献血の部屋は^{*}MCSなど日本でも血小板採血で使用する機器が置かれていた。その後、1階に下り、検査・製剤室を案内されたが、通路への入口にはエアカーテンが設置されているものの嚴重ではなかった。血液の保管室（冷蔵庫、冷凍庫、血小板振とう機が並んでいる）では実際に血液製剤を見ることができたが、冷蔵庫内の赤血球は管理温度が2℃～8℃（日本では2℃～6℃）で、赤血球の採血バッグは日本より大きく（350mlと450mlの2種類。日本は200mlと400ml）、基準の違いを確認できた。また、血小板振とう機には全血献血由来の血小板が保管されていた。日本では成分献血由来の血小板（5単位以上）の供給が主流のため現在はあまり見かけないが、フィリピンでは現在も1～2単位の血小板製剤を使用していることを知った。初めて海外の血液事業を見学したが、フィリピンでも日本と同様の資機材を使って業務が行われていることに親近感を持った。同時に血液事業が赤十字の重要な業務であることも再認識できた。

※MCS：成分献血用の機器名

今回の派遣では訪問先で多くの方々との出会いがあった。2日目のフィリピン赤十字社本社に始まり、私たちはマニラ支部、ケソン支部、バタアン支部、ラス・ピニャス副支部と各支部を訪問し赤十字の職員及びユースの方々との交流を深めた。

また、マニラ市内のマニエル高校、ケソン市のルパン・パンガコ小学校、バタアン州バラング市のバタアン公立高校の3校を訪問し、各校の児童・生徒とJRCメンバーの交流会が開かれた。

✂️ フィリピンを訪問して (派遣団員所感)

訪問先の各学校では、多くの児童や生徒が外に出て我々の訪問を歓迎してくれた。また、歌や楽器の演奏、ダンスなどで出迎えてくれた学校もあった。訪問先では必ず自己紹介をするのだが、その際は今回の通訳兼ガイドを務めていただいたリンさんから教えてもらった英語やタガログ語が大いに役立った。タガログ語を交えた自己紹介は周囲の反応が良く、時折、笑いが起きるなど相手によく伝わっていた。自己紹介後には互いに打ち解けて、写真を撮ったり、質問をしあったりと微笑ましい光景を見ることができた。



学生との交流 (ラス・ピニャス副支部)

各学校での交流会はどれも全校をあげた盛大なものだった。フィリピンの郷土芸能を中心として、バンブーダンスなどのリズムカルで力強いものから、女子による蠟燭を灯しながらのダンスでは指先まで神経を集中する繊細さがあり、それぞれを



“よさこい”を披露 (マニユエル高校)

懸命に表現しようとしている子どもたちの姿に感動した。派遣メンバーもこの日のために準備したプログラムで歓迎に応じていった。山口さんの書道パフォーマンスや全員での“よさこい”は堂々としていて素晴らしかった。また、“ドラえもん”の絵描き歌や“竹とんぼ”、“ジェット風船”を披露した際は会場が和やかな雰囲気になった。

今回の派遣でも特に印象に残っていることは、6日目のラス・ピニャス副支部で現地の学生を前に派遣メンバーが日本や福島県についての発表が挙げられる。2日目のフィリピン赤十字本社でも発表する機会があったが、そこでの経験や反省を踏まえて、派遣メンバーが菅野先生、吾妻先生、リンさんの指導を仰ぎ、英語を交えて地元の学生たちに向けて発表を行った。日本の写真や福島県の地図を示しながらの説明に地元の学生たちも真剣に聞き入っていた。最後の発表だったが、見ている私たちにもメンバーの思いが伝わってきて、これまでのフィリピンでの活動の成果を窺うことができた。発表後には交流の時間が設けられ、会話を通して互いの親交を深めていた。

施設訪問や交流のほかにも、ソルトパヤタスの訪問も印象深いものだった。最初に宿泊していたメトロマニラは高層ビルが立ち並び、幹線道路は多くの車両で日常的に混雑しているが、少し郊外に進むと風景が一変し、粗末な建物や田畑、山林が広がっている。マニラの北東部にあるケソン市から北へ向かうと大きなゴミの山（スモーキーマウンテン）が現れ、そこがソルトパヤタスである。住民たちは集積されるゴミから資源物や食料を集めて生活している。今回は家庭訪問が許され、1軒の家庭にうかがった。窓が開いていても薄暗いその家で母親と高校生の娘さんに話を聞くことができた。母親は病気療養中、父親も定職が無い状

✂️ フィリピンを訪問して (派遣団員所感)

態で収入も不安定な状態だそうだが、娘さんは建築家になる夢を持ち、将来は家族を楽にしたいと語っていた。また、食事ができることが幸せであるとの話に、日本では当たり前のことがそうではなく、自分は何も気付かずに過ごしていることが理解できた。高校生メンバーも同年代の少女から語られる言葉に衝撃を受けたと思う。彼らもこの経験を忘れず今後の生活を送っていけば、苦しい時も頑張れるはずだ。

6泊7日の訪問日程は過密で、派遣メンバーは連日朝早く出発し、ホテルに戻ってからも反省会と翌日の訪問に向けての準備を夜遅くまで行っていた。疲労もかなり溜まっていたと思うが、全員が大きな怪我や病気もなく無事に日程を終えられたことが何よりだった。成田空港から福島県へ帰るバスの中で派遣メンバー全員が感想を述べたが、出発前の不安な表情から充実した表情に変わっていたことと、目標を持って今後もJRC活動が続けていくという言葉が出て、頼もしく感じ

た。今回のフィリピン派遣がこれからの皆さんの学校生活や人生において糧になればと思う。私も今回の随行を通してフィリピンの赤十字社職員やユースボランティア、JRCメンバーの精力的な活動に触れることができ、同じ赤十字事業に携わる職員として意識を更に強く持つことができた。最後に、引率いただいた菅野勇一郎先生ならびに吾妻美和先生には多大なるお力添えを賜り心より感謝申し上げます。



お別れ会（8／14）にて



フィリピン派遣に参加して

日本赤十字社福島県支部 事業推進課 主事 葛岡大輔

昨年度に引き続き、日本赤十字社福島県支部が実施する東日本大震災の復興支援事業の一つとし

て、青少年赤十字国際交流事業「フィリピン派遣」が実施されることに伴い、支部職員として参加させていただいた。

フィリピン派遣は、8月9日から15日までの7日間の日程で実施された。青少年赤十字の実践目標の一つに「国際理解・親善」があり、この目標をより具体的に実践するため、派遣された高校生と現地のJRCメンバーとの、様々な交流プログラムが組まれた。また、忘れてならないもう一つの役割は、本事業が海外の赤十字社からの救援金で実施されていることへの感謝と、東日本大震災発



交流会の”よさこい”

フィリピンを訪問して(派遣団員所感)

災から現在までの福島県の復興の状況を伝えることだった。

フィリピンで過ごした7日間は、参加した高校生にとっても、随行した私たちにとっても、非常に貴重な経験となった。

【国際交流】

今回の訪問では、多くの方々との出会いがあった。滞在中、フィリピン赤十字社の本社訪問からスタートし、マニラ支部、ケソン支部、バタアン支部、ラス・ピニャス副支部の各支部を訪問したほか、マニラ市にあるマニエル高校、ケソン市のルパン・パンガコ小学校、バタアン州バランガ市にあるバタアン公立高校も訪問し、フィリピン赤十字社の職員やユースボランティアの方々、各校の児童・生徒と交流を深めた。

各学校を訪問した時は、日本では考えられないほどの歓迎をしてくれた。また交流プログラムでは、お互いの国の国歌斉唱からはじまり、フィリピン側からは民族衣装を纏っての舞踏や歌、ダンスなど、それぞれの学校の児童・生徒が工夫を凝らして披露してくれた。こちらからは、書道パフォーマンスやドラえものの絵描き歌、よさこいなどを披露し、交流を深めた。また、竹とんぼやジェット風船なども用意し、参加してくれた学校の児童・生徒にプレゼントもした。

派遣メンバーもはじめは緊張して、なかなかうまく披露できなかった所もあったかと思うが、次第に発表も堂々としたものになってきて、福島の代表として頑張っている姿に感動を覚えた。

【ことばの壁】

フィリピンの公用語はフィリピン語（タガログ語）と英語だが、派遣メンバーも含め、私も少々不安を抱えての滞在となった。

今回の派遣団長の吾妻先生は英語の先生ということもあって、代表での挨拶等、吾妻先生に前に出ていただく機会が多々あった。私自身、英会話については自信がなく、相手の言っていることばは何となく理解できても、私が伝えたいことが伝わらない（伝えられない）といった状況が多々あり、なんとか身振り手振りでしのいだこともあった。

ガイド兼通訳のリンさんから、タガログ語での自己紹介の仕方を教えてもらえたので、実際に使ってみたところ、非常に受けが良かった。現地の方々にとって、聞き慣れた言葉で相手が話してくれるというのは、嬉しいことなんだと思った。訪問先の学校で、生徒が日本語で自己紹介してくれると、私もなんだか親近感が湧いてきて、非常に嬉しく感じた。

参加メンバーも、はじめは「言葉が伝わらず、会話がうまくできない」といった話が出ていたが、吾妻先生やリンさんに聞いたりしながら、ジェスチャーも交えて、一度で伝わらなくても、何度も言葉に出して交流を深めようとする姿に感心した。「話が通じて、会話が盛り上がった！」ということを知ったときには、なんだか私まで嬉しく思った。

【福島の現状】

今回の訪問での、私たちの大きな使命の一つに、福島の現状を伝えるということがあった。

2日目のフィリピン赤十字社本社訪問の際にも発表の機会はあったが、あまり時間が取れないこともあって、思うような発表が出来なかった。

そんな中、6日目に、もう一度発表の機会が訪れた。ラス・ピニャス副支部で、現地の学生やJRCメンバーを前に、日本や福島について発表した。写真や地図を使い、英語を交えながら、日本とはどういう所なのか、福島県とはどういった所



福島についての発表のようす

で、東日本大震災以降どうなってしまったのかという説明をした。また、東日本大震災の際にはフィリピンから（海外救援金を含め）数多くの支援をいただいたことへの感謝が伝えられたことで、今回の派遣の大きな目的は達成されたと、同行した小林係長とともに安堵した。

【貧富の差・階級社会】

フィリピンの各地をまわって、様々な景色を見てきたが、一番驚いたのは、貧富の差が大きいことと、階級社会について実感させられたことだった。

メトロ・マニラ（マニラ首都圏）では高層ビルが建ち並び、豪華な暮らしをしている方々がいる一方で、郊外に出るとそんな景色は一変した。

特に印象的だったのは、パヤタス地区を訪問した時のことだった。派遣メンバーにとっても、一番の衝撃を受けたところではないかと思う。立ちこめる悪臭と、巨大なゴミの山は、思わず息をのむほどだった。

ケソン市パヤタス地区には、主にマニラ市から排出されたゴミの処分場がある。スモーキーマウンテン（大きなゴミの山）と呼ばれ、その周辺に住む住民たち（スカベンジャー）は集積されるゴミから資源物などを集め、それを売ることによって生計

を立てている。

スモーキーマウンテンは現在も拡大が続いている。フィリピンにはゴミの焼却場がないため、元々は深い谷底にゴミを投棄し処分していたが、投棄されるゴミの量は日増しに増加し、深い谷を埋め、今では巨大な山を形成している。しかも、ゴミ山拡張のために、立ち退きを余儀なくされた住民もいるとのこと。

2000年7月10日には、高さ30mものゴミの斜面が幅約100mmにわたって崩落し、230名以上の方々が犠牲となる事故があった。その際に、息子さんを亡くされたという話を聞くこともできたが、日本では考えられないような現状に、話を聞いたメンバーは一様に衝撃を受けたようだった。

現地で活動をしている特定非営利活動法人ソルト・パヤタスの方々の協力もあり、パヤタスに住んでいる方の家庭を訪問することができた。

私が訪れた家庭は、日中でも薄暗い狭い部屋で生活していて、父親は定職がなく、母親は病氣療養中ということで、貧しく収入が不安定な状況だったけれど、高校生になる娘さんは大きな夢を持ち、日々勉強を頑張っているとのことだった。将来は、できれば海外に出て仕事をしてみたいとも話していた。日本にもいつか行ってみたいという話も聞いた。

母親からは、パヤタスに来た時は、希望を持っ



パヤタスでの家庭訪問（手作りバッグのプレゼント）

✂️ フィリピンを訪問して(派遣団員所感)

て来たという話も伺った。その時に就いていた仕事よりも良い収入が得られるということだったけれど、実際には、多すぎる人々がパヤタスに来たことにより、年収は年々減ってしまったとも話していた。

案内してくれた現地スタッフの方からは、犬や猫のフンを踏まないように、くれぐれも怪我などしないように、犬などに咬まれたりしたらすぐ病院に行かなければなりません、と注意喚起があった。なお、蚊によって媒介される感染症は、この時はまだパヤタスでは発生していないということだった。

日本とは違う衛生環境の中で、自分が今送っている生活とは全く異なった状況下で日々生活している姿を目の当たりし、派遣メンバーも、意識を新たにしたのではないかと思う。今の自分にとって当たり前のことでも、実はそうではなく、恵まれた環境にいることを忘れてはならない。

【災害多発国】

フィリピンは日本同様に災害の多い国で、毎年20個は台風が通過し、地震や火山噴火なども頻発している。最近では特に、2013年に発生した台風30号「ハイエン」の被害は大きく、多数の死傷者や被害が出た。

2日目にフィリピン赤十字社の本社を訪問したが、その時に、台風による被害の状況や、救護活動の様子、その後の復興支援の状況などを、担当の方がPPT^{*}を使って分かりやすく説明していただいた。

救急車や消防車などの特殊車両を見学させていただいたり、2週間前に業務が開始されたばかりの新社屋内を案内していただいたが、特にその中でも、24時間体制で災害情報を収集しているオペレーションセンターの見学は、非常に興味深いも



フィリピン赤十字本社にあるオペレーションセンター

のだった。

災害が多い国同士ということで、相互理解・協力できることはたくさんあると思うし、我々赤十字のスタッフだけでなく、今回の「フィリピン派遣」といった事業を通じて、JRCメンバー同士も相互理解を深めていってほしいと強く願う。

※PPT：パワーポイントの意。

スライドをプレゼンテーションできる様に映し出すソフト名。

【地理】

日本と同じく島国だが、フィリピンは7,000を超える島々で構成されている。その中のほんのごく一部に訪れただけだが、地理や気候の違いを実感したのではないかと思う。私たちが訪れたのは丁度雨期で、気温・湿度ともに高く、強く効かされている冷房も相俟って、体調を崩す生徒がいるのではないかと心配していた。しかし、滞在中は殆ど雨に降られることもなく、体調を大きく崩す生徒もおらず、ほっとした。

参加メンバーも、暑さ対策はしっかりしていたし、蚊などに刺されないように対策するなど、日本とは気候も環境も違うということを、しっかり頭に入れてこの事業に臨んでくれていたようだった。

【交通】

フィリピンでは慢性的な交通渋滞が発生していた。車線の数もあまり意味を成していないようで、非常に多くの車両が行き交っていた。

信号も非常に少なく、手信号で交通整理をしている場面もみることがあった。マニラなど一部の地域では、月曜日から金曜日までの間、ナンバープレートによる流入車の規制も行われていると話を伺った。

これだけの交通事情で、よく事故を起こさないものだのと、妙に感心してしまったほどだった。ほかにも、日本とは違い、ドライバーが頻回にクラクションを鳴らしているのも印象的な光景だった。特徴的なものとして、「ジープニー」という乗合タクシーや、三輪タクシーの「トライシクル」という交通機関もある。

【食文化】

私はフィリピンに来るのが初めてでしたが、日本とは違う食文化にも、すぐ慣れることができた。基本的に辛い料理はなく、私にとっては全体的に甘めの味付けのものが多かったと感じる。

島国だけに海産物は豊富で、様々な料理をいただいた。ほかにも、豚肉がよく食べられていて、ほぼ毎日、何かしらの豚肉料理を口にしていた。

食事の際は、アイステイーを飲む機会が多かったが、非常に甘く、(基本的に、アイステイーやコーヒーにガムシロップなどを入れて飲む習慣がなかったので) その甘さに慣れるまでちょっと時間がかかった。しかし帰国してから、その甘い飲み物が妙に欲しくなったりすることもあり、なんだか不思議な感覚だった。

今回のフィリピン派遣では、大過なくプログラムを終えることができたことは、随行した私に

とって、一番の成果だった。

日本に帰ってきてからの参加メンバーの顔つきは、フィリピンに着いたばかりの頃とは全然違って、この一週間で大きく成長した姿に感動した。フィリピンでの経験は、これからの人生において大きな糧となるだろう。国際交流という、私が同い年の時には考えもしなかったことに挑戦し、自分たちで考え・実行し、努力して、充実した7日間を過ごすことが出来たことは、大きな自信にもなると思う。今回の経験を、これからのJRC活動に生かして欲しいと強く願う。

最後に、同行いただいた派遣団長の吾妻先生、菅野先生には、私が未熟だったこともあり、何かとご心配・ご迷惑をおかけしたかとは思いますが、二人からのお力添えにより、大過なく全プログラムを終えることができました。

心より感謝申し上げます。



マニラ国際空港で帰り際に

「フィリピンの医療と介護について」

福島県立福島高校 2年 山口 愛由美

計り知れないごみの量。限られた水や米。群がるハエ。今にも崩れそうな家。そのような環境の下で生きている人々は、十分な医療を受けることができるのだろうか？

スモーキー・マウンテンで有名なパヤスタ地区。フィリピンの中でも貧困層の人たちが暮らす場所だ。働いている人の一日の収入は、多い時で180ペソ（日本円で約450円）、少ない時で60ペソ（日本円で約150円）だそうだ。このお金では、米を買うのが精一杯である。では、重病になって救急車を呼ぶのにいくらかかるのか。1,500ペソ（日本円で約4,000円）である。米を手に入れるだけでも大変なのに、救急車を呼ぶなど不可能に近い。そのため、病気になっても我慢する人が多いそうだ。非医学的ではあるが、ヒロットマッサージ、薬草、ヒーリングパワーなどの民間療法などで済ませてしまう人もいる。また、近くにある病院では、医者がいる時いない時が決まっておらず、薬も十分でない。薬がない場合はあきらめてもらうそうだ。このような状況は、医療技術が発達し、何不自由なく生活している私たち日本人には考えられないことだ。以前、お金がなく日々の暮らしも困難な貧困層の人々は、人間らしい扱いを受けていないことがあるとテレビで見た。どんなに貧しいとは言っても、同じ人間である。限られた中で工夫をし、人々に適したケアを判断・実践する能力が求められると思った。また、「病院に行けるだけで幸せ」と言っていた。その通りだと思う。日本人もそうだと思うが、病気を治してもらうだけではなく、安心感を求めて病院に行く人もいるだろう。そのような場所がもっと身近になってほしいと思う。



パタヤス地区の風景

そして、フィリピンの衛生問題から、健康に害がないのか心配になった。フィリピンの人たちにはモノを冷蔵するという感覚が無く、市場でも、肉や魚を含む全てのものが常温に置かれて売られている。私も、実際に市場を見学したが、臭いがきつく食べようとは思えなかった。フィリピンの人たちにとってはそれが当たり前なのかもしれないが、もっと管理状態をよくすることで、病気を防ぐことができるのではないかと考えた。

日本は、少子化や医療の発達により、高齢化社会が急速に進んでいる。お年寄りの数が増えたことによって、介護施設の不足、介護者の不足という問題に直面している。日本の場合、介護施設に入所する人が多く、入所待ちをしている人も全国に40万人いる。また、そのまま施設や病院で死を迎えるケースがほとんどだ。このように、日本が介護の問題を抱えているため、フィリピンではどうなっているのかを知りたくなった。フィリピン

自由研究

は、日本とは正反対で、人口のグラフはピラミッド型であり、若者の数が多い。そのため、高齢者を介護するための手は十分に足りている。介護施設の数も少なく、入居できる人は裕福な人たちだそう。家での介護が基本で、皆が積極的であたたかいと言っていた。結果として、フィリピンでは高齢化が進んでいないことから、介護の問題は

ないに等しいことが分かった。

今回の2つの研究を通して分かったことは、医療の問題に関しても介護の問題に関しても、社会全体のつながりが大きく、単独で考えることは難しいということだ。問題を考えて解決するためには、広い視野と豊富な知識が必要である。このことをこれからの生活に繋げていきたいと思う。



歓迎会の様子

自由研究「国際理解とコミュニケーション」

学校法人福島成蹊学園福島成蹊高校 2年 小松 紗綾

今回のフィリピン派遣で、国境も言語も生まれ育った環境も風土も習慣も違う私たちが何故お互いの気持ちを分かり合い、コミュニケーションを図ることが出来たのか。それは、世界共通の“笑

顔”があったからだと思う。実際にフィリピンに行ってみても毎日のように自分の伝えたいことを伝えられないもどかしさや、もっと英語が話せれば、もっと会話が出来て楽しかったのだろうと思うことが多くあった。それゆえ、初めて自分の伝えたいことを伝えたり、相手の質問に答えることが出来た時の喜びは今でも私の心に強く残っている。

ケソン市に訪れた時のことである。現地のジュニアレッドクロス ユースメンバーとの交流でパートナーになったkarlに何か質問され、聞き取れずもう一度言ってもらうことにした。それでもやはり理解できず、答えることが出来なかった。



2日目のマニラ支部

自由研究

私が言葉をよく理解できないことを謝ると彼は聞きたかった質問と「顔が硬いよ、笑顔笑顔。」と紙に書いてくれた。その時、改めてフィリピンの人々のあたたかい思いやりに感動した。笑顔でいると自然と相手も笑顔になり、コミュニケーションが取りやすくなる。これは彼を見ていて気付いたことである。彼の気遣いのお蔭で私たちは時間の許す限り楽しく会話をする事が出来た。このような優しさ、相手への思いやりに私は毎日救われていた。フィリピンの人々のおもてなし精神のお蔭もあり、自分が思ってた以上に本当に多くの方とたくさんコミュニケーションが取ることが出来たと思う。



みんなから笑顔

また、私たちが自己紹介の際に少しタガログ語を混ぜて話すと、現地の方々はとても喜んでくれた。現地の方のリアクションの大きさは、いつも私たちの励みになっていた。私たち日本人は世界から見るとリアクションがうすい。私はこのような国民性の違いは、生活文化の違いにあると考えた。フィリピンなどの異国では、ジェスチャー使いながら会話をするが、日本ではあまりジェス

チャーをしながら会話をしない。何故、文化の違いがあるのか。それは、それぞれの国で話される言語の数に違いがあると考えた。日本では基本的に日本語の1つしか使われていない。そのため、日本国内にいれば、私たちは日本語さえ使えば誰とでも会話ができる。しかし、フィリピンでは違う。フィリピンでは、80種類以上の言語が今現在でも使われていて、公用語として主にタガログ語と英語。また、タガログ語を初めとした8大言語で構成されている。同じ国内にいれば、自分とは違う言葉を話す人ともコミュニケーションをとる必要がある時もある。これはフィリピンの人がジェスチャーや笑顔の多い理由の1つであると思う。

私は今まで日本国内で生活していれば意志疎通が出来ると思っていた。しかしグローバル化が進む中、私たちは国内でも自分とは違う言語を話さないといけない時が来るだろう。そこで私たちは相手を思いやる気持ち、笑顔、ジェスチャーさえあれば、国境も言語も生まれ育った環境も風土も習慣も違っても私たちはお互いをわかり合うことができるだろう。



3日目の夕食会

『日本とフィリピンの幸福度について』

学校法人東稜学園福島東稜高等学校 2年 大 木 信 二

環境が変われば価値観も変わる。では先進国である日本と途上国であり貧富の差が激しいフィリピンとではどのような違いがあるのだろうか。宗教や食文化など様々な違いがあるが、今回は幸福について調査していこうと思う。「幸福」というワードは、近年世界的に注目されている。日本でも「幸福学」関連の書籍が本屋さんに沢山並ぶ。2011年7月に国連で歴史的な決議が通過した。国連加盟国に幸福度の調査を行い、結果を公共政策に活かすことを呼びかけました。2013年からは毎年3月20日は、国連が定めた国際幸福デーとなり、全世界でハッピーデーが祝われた。世界的に関心が高まっている「幸福」について、今回のフィリピン派遣を通して研究してみたいと思った。



笑顔のユースメンバー

今回の調査方法は、アンケート用紙による回答と聞き取り調査による二つの方法とした。また、回答者対象を若者に絞った。日本は、私の身近にいる若者（多くが高校生）、フィリピンは、訪問した高校生やユースメンバーである。

まず、「幸福になるために何が必要であるか。2つ答えてください」という質問の回答結果が、

表1である。

【表1】

	日本	フィリピン
1 番多かったもの	平和	平和
2 番目に多かったもの	世界各国が協力関係にあること	世界各国が協力関係にあること 民主主義であること

日本の若者とフィリピンの若者に、「幸福になるために何が必要であるか」問いに対して、日本、フィリピンとも100%の人が平和であることと答えた。「平和」とはなんなのだろうか。辞書で調べると戦争がなく穏やかな状態であること、争いや心配事がなく穏やかであることとあった。幸福のためには、穏やかで、心配事がないことが絶対条件ということである。穏やかな生活から自分の幸福が生まれ、他者の幸福のお手伝いもできるようになる。平和でなければ幸福の連鎖は生まれまいだろう。2 番目に多かった「世界各国が協力関係にあること」という回答には、戦争がない状態に繋がるとともに世界中が一丸となって問題を解決していけるということであり、一国だけでは「幸福」になるのは難しいということの裏返しとも取れる。アンケートには、2つの回答を求めたが、フィリピンの若者からは、3つの回答が出てきた。3つ目の「民主主義であること」である。この回答にはフィリピン状況が大きく反映していると予想される。民主主義が行き渡る国になって欲しいというニュアンスが込められていたように感じた。調べてみるとフィリピンは民主主義国で

自由研究

はあるが民主主義の制度と機能との乖離がある。具体的には選挙における金と暴力の支配などがあるらしい。また、フィリピンで目の当たりにした貧富の格差からも労働市場においても民主主義（市場原理）が働かないことが再認識できた。

次の質問は、「幸福を感じる時」「学校について」「病院について」である。アンケートをまとめたのが表2である

【表2】

質問内容	日本	フィリピン
幸福を感じる時	<ul style="list-style-type: none"> 友人といる時 一人で好きなことをしている時 	<ul style="list-style-type: none"> 家族といる時 友人といる時
幸福でないと感じる時	<ul style="list-style-type: none"> 親からうるさく言われる時 	<ul style="list-style-type: none"> 家族が仕事でしばらくいっしょにいられない時
学校について	<ul style="list-style-type: none"> 学校に行くのが面倒くさい サボりたい 	<ul style="list-style-type: none"> 学校に行けることは、とても幸せ
病院について	<ul style="list-style-type: none"> あまり考えたことがない 	<ul style="list-style-type: none"> 病院に行けることは、幸せ

幸福とを感じる時は、環境による違いも大きくことが分かる。まずは、日本での調査結果だ。幸福

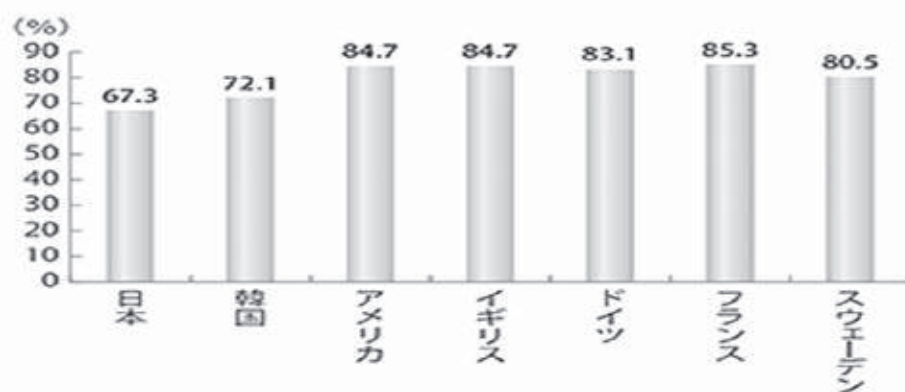
とを感じる時は一人で好きなことをしているとき。並びに、友人とのいるときであった。不幸とまではいかなくても嫌なときは、親がうるさいなど家族の存在への不満などが多かった。フィリピンでは幸福とを感じる時は家族または友人と一緒に過ごす時間や家族または友人といる時で、嫌な時は家族が仕事などの関係で一緒にいれなくて寂しい時などが上がった。このことから日本とフィリピンは、ほぼ正反対の回答がでたといえる。日本の若者が、親からいろいろうるさく言われることに不満を感じているという回答を裏付ける統計結果がある。『平成26年版子ども・若者白書』（今を生きる若者の意識～国際比較からみえてくるもの）

<http://www8.cao.go.jp/youth/whitepaper/h26gaiyou/tokushu.html>

家族といる時の充実感に対する回答である。

この資料からも、日本の若者が、家族といるときの充実感や家庭生活の満足度は、相対的に低いことが見えてくる。では、なぜなのか。親から子どもへの期待感が親のうるさい言葉になり、子どもにプレッシャーを感じさせているのではないか。私の友人の話を聴いているとそう思えてくる。フィリピンの若者からは、先行きの生活に不

図表11 充実感（家族といるとき）



(注) 「あなたは、どんなときに充実していると感じますか。」との問いに対し、「家族といるとき」に「あてはまる」「どちらかといえばあてはまる」と回答した者の合計。

自由研究

安を感じていることが、何気ない会話からも伝わってきた。その不安に対して、いつも見守り、応援してくれるのが家族である。家族が心の支えになっていることが伝わってきた。

フィリピン研修3日目に、パヤタス地区を訪問した。まず、パヤタス地区のゴミ山の崩落事故によって、子どもから大人まで数百名の人が生き埋めになる大惨事が起こった。その犠牲者の霊を慰める慰霊碑を訪問し1人1本ずつ花を祭壇に供えた。ごみ山のすぐ傍に住み、山でリサイクル資源を拾い集め、少ない現金収入を得ていた人たちは、この事故によって家族を失い、家を飲み込まれ、収入源も失った。慰霊碑の前で、被災者の一人であるシェリーさんのお話を聞いた。崩落事故により、一瞬のうちに、当時住んでいた自宅は、押し寄せるゴミに潰されてしまい、シェリーさんの息子さんは腕を切断することになってしまったそうである。シェリーさんのお話の後、私はシェリーさんに「幸せを感じる時はいつですか」という質問とした。それに対して、シェリーさんは、「考えてみたけど思いつかないなあ…」と言われた。しかし、その後、なんとか、言葉として出たのが、「家族といるときかな」という一言であった。その時に、少し救われた気持ちと家族がシェリーさんの心の支えになっていることを感じた。また、私が訪問したルビーさんの家でも、ルビーさん家族に同じ質問をした。ルビーさん宅は、とても小さく、隣の家とは、薄い板で仕切られているだけなので、隣の家の話し声がすべて聞こえてきた。ルビーさん家族は、フィリピンの内戦（政府軍と革命軍の武力衝突）から、家族の命を守るため、生まれ育った田舎の家、田畑を売り、パヤタスにきたそうである。家や田畑は、足元をみられ、とても安く買い叩かれたそうだ。紛争に巻き込まれないよう、逃げるようにマニラにきた。マ

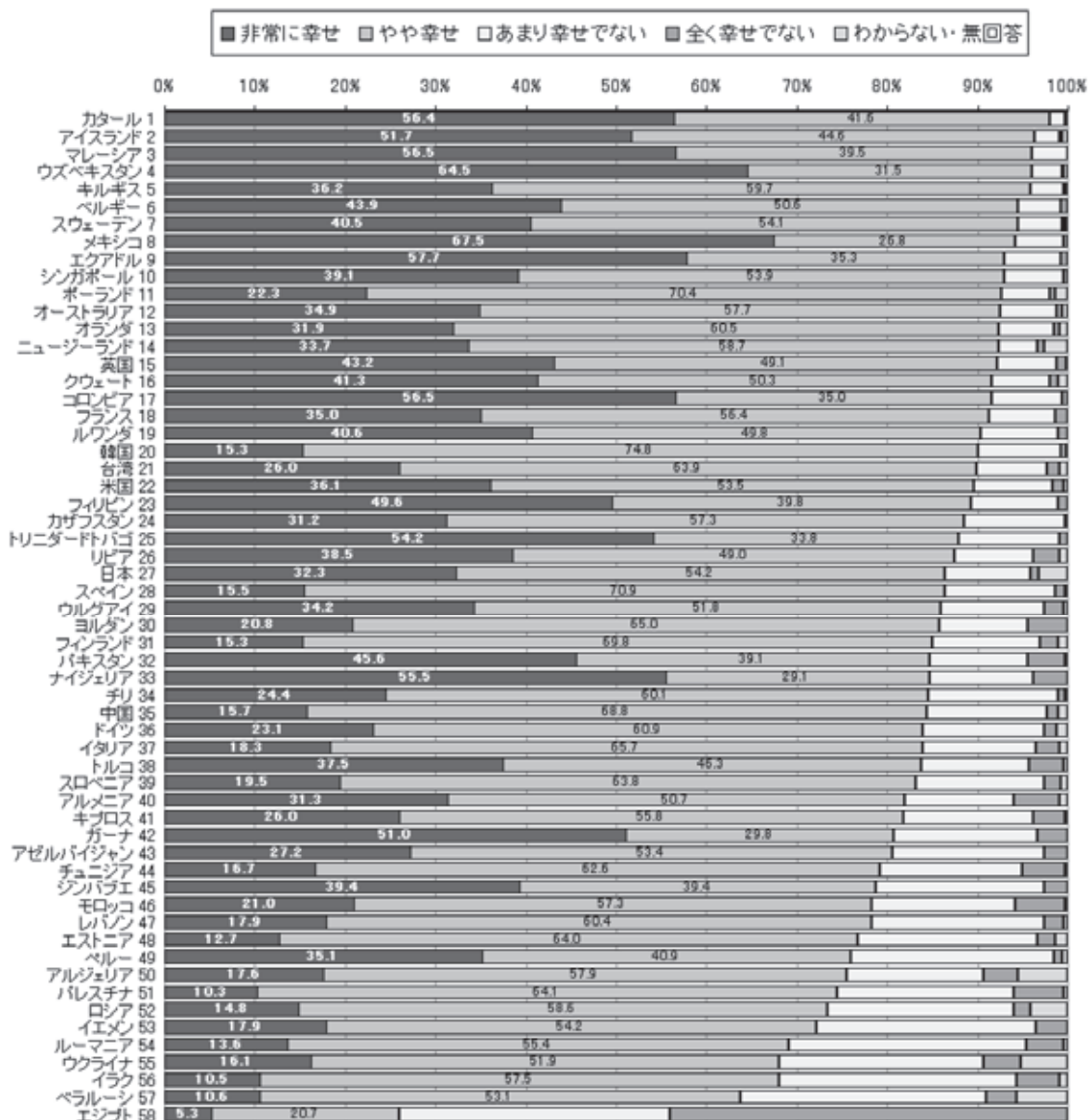
ニラに来てすぐは、まずまずの生活ができていたが、お父さんの職場がなくなると食べていくことも厳しい生活になり、パヤタスにくることになってしまったということであった。以上のようなお話を聴かせていただいた後に、私はルビーさんに「幸せを感じる時はいつですか」という質問とした。「家族といる時」とすぐ答えが返ってきた。ルビーさんの娘プリンセスさん（中学1年生）にも同じ質問をしたが、「家族といる時」と「学校の成績があがった時」という答えが返ってきた。パヤタス地区の人たちにとっても家族は生きる理由であり、心の支えになっていることが実感できた。

学校についての質問では、日本の若者は、学校が面倒くさい、サボりたいなどの回答であったが、フィリピンでは学校に通えることが幸せだという回答が多かった。フィリピンでは、パヤタス地区の子どもの多くが、学校に行けず、ゴミ山から売れるものを拾い集め家族の生活費としている現状がある。パヤタス地区以外でも学校に行ける子どもは少ないらしい。フィリピンの若者は、学校に行けることが、どんなに幸せなのか。学校で身に付けたものがあれば、将来、安定した仕事に就けるという期待感となっていることを実感しているのだろう。病院についての質問については、フィリピンでは、病院に通えることが幸せという回答が多かった。これは、生活費の大部分が食費になり、病気や怪我をしても医療費に回せるお金がないことを意味している。日本では、病気や怪我をすると、通院できることは当たり前になっていて病院に行けることに、特に有難みを感じられないのだと思う。

最後に、冒頭で取り上げた国連の幸福度調査とは、別の調査を紹介したい。世界価値観調査である。この調査は、世界数十カ国の大学・研究機関の研究グループが参加し、共通の調査票で各国国

自由研究

幸福度の国際比較(2010年期)



(注) 各国の全国18歳以上男女1,000～2,000サンプル程度の回収を基本とした意識調査の結果。幸福度を「非常に幸せ」「やや幸せ」の合計ととらえ、その大きい順にソート。2010年期は各国2010～2014年の調査。ただし、アイスランド、ベルギー、英国(北アイルランドを除く)、フランス、フィンランド、イタリアは欧州価値観調査2008～09年による。

<http://www2.ttcn.ne.jp/honkawa/9480.html>

民の意識を調べ相互に比較している国際調査であり、1981年から、また1990年からは5年ごとの周回で行われている。各国毎に全国の18歳以上の男女1,000～2,000サンプル程度の回収を基本とした個人単位の意識調査である。なお、ここで取り上げている2010年期は2010～2014年の調査である。

調査結果を踏まえると日本は金銭面や物資面、

技術面で裕福な国ではあるが精神の豊かさという面では親切で、家族思いで、お互いに助け合いながら、前向きに生活しているフィリピンの方が豊かなのではないかと考えた。フィリピンは日本人の多くがなくなってしまったかけがえのない大切なものを持っているのではないだろうか。

今、私達が世界の問題を解決するために直接で

自由研究

きることは少ない。しかし将来のことを考えると時間が多くある今の内に多くのことを学ぶべきだと思う。世界に触れ、価値観の違う考えを知り、受け入れ、そして同じ地球で一緒に幸福に過ごせるようになるためにどうすべきかを一緒に考えることが重要である。その為に今、多くの考え方

に触れていくべきだと考える。私は今回フィリピン派遣の経験を活かし私達が失ってしまった大切なことを思い出すとともに日々の生活に役立てていきたい。そして高校生の内に多くのことを学び、経験して将来に活かしていきたいと考える。



バタアンユースメンバーと昼食会



フィリピンの水の問題について

学校法人松韻学園福島高等学校 3年 佐藤 佑 樹

1 テーマ設定について

高校1年生のときにテレビのニュースで「水問題」が扱われていた。水道の蛇口をひねると安心して飲むことができる日本の水も、数年後には、確保できなくなる可能性が高いという内容だった。水が自由に使えない時代が来る、という漠然とした不安を感じたことを覚えている。

人類にとって欠かすことのできない水について、フィリピンではどのような状況なのか関心を持つようになった。今回のフィリピン研修では、水問題をしっかりと学習しようと思った。

2 事前研究

フィリピン派遣前に、ネットで世界の水問題について調べた。その中のひとつを紹介する。ジャイカのWebページに、池上彰氏と沖大幹（東京大学生産技術研究所教授）の「水の問題」というテーマで対談された内容が記載されていた。沖教授は、グローバルな水循環と世界の水資源に関する研究を行っており、「バーチャルウォーターを考慮した世界の水需給推計」で第18回2008年）日経地球環境技術賞を受賞している。

（ジャイカのURL：<http://www.jica.go.jp/aboutoda/ikegami/01/>）

自由研究

対談の中で沖教授は、①アジア・アフリカをはじめとする途上国地域はもちろんのこと、先進国においても、世界の人々の命、生活、そして経済を考える上で、最重要事項が「水」の問題であること。②「水」は、人々の命を、直接的にも間接的にも支えているもっとも重要な「資源」であること。③「安全な飲料水の確保」は人々の健康や命の問題につながること。（実際に、世界では毎年180万人の子どもたちが不衛生な水等を原因とする病で命を落としていている）。④「農業用水の安定供給」は食料の問題につながること。⑤「下水対策、水質汚染対策」は環境や公衆衛生の問題につながり、突発的な洪水や台風などにも応じられる「治水対策」は、人々の生命や財産を守るために、なにより地域社会の安定にとって不可欠なこと。などをあげてた。水が人類にとって、いかに重要か再確認させられた。



マニラ市内の市場の果物

3 フィリピン派遣で学んだこと

(1) 赤十字本社ブライアンさんの講話より

フィリピン赤十字本社のブライアンさんより、2013年フィリピンに甚大な被害が出た台風の話しと台風による災害について、フィリピン赤十字がどのような活動をしたかスライドにより紹介していただいた。その台風は、中部のビサヤ地域を東から西に横切る形で通過し、約1,700万人が居住

する広範な地域に対して、フィリピンの台風警報で最高段階にあたるシグナルNo.4が発令された。（シグナルNo.4とは風速51m/s以上の風が12時間以内に予想される場合に発令される警報）その台風により、死亡・行方不明は1万人にのぼり、1,600万人の家屋が一瞬のうちに無くなったそう。ココナツ農園に大被害を及ぼし、大木が根こそぎ倒れ、ライフラインは大規模に断絶し、地域全体で深刻な被害が出た。その災害に対して、フィリピン赤十字は、迅速に救護活動にあたったこと、フィリピン国民の多くが、利他的な行動を取っていたことを伝えてくださった。その講話の最後に、「フィリピン国民は、日本からの物資の支援、技術者派遣等について感謝している。特に、川の水を飲料水にする機械装置を寄贈してもらい、生活に欠かせない飲料水が、被害者の手元に渡すことができたことについてとても助かった。」という感謝の言葉で講話を締めくくられていた。災害支援だけでなく、平時から川の水を飲料水にする機械装置を出来るだけ多く寄贈できたらと思った。

(2) パヤタス（貧困街）での学習より

フィリピンでは、やはり水道の水は飲んではいけないと言われた。歯磨きや顔を洗うぐらいなら大丈夫だけど、絶対に飲んではいけないということだ。実はフィリピンの水道管は錆びている物が多いため飲み水としては適していないそうで、そのために、ミネラルウォーターをわざわざ買って生活しているそう。しかし、これも都市部でのことで、私たちが訪問したゴミ山のあるパヤタス地区では、水道は一部しか通っておらず、井戸水を汲んだり、川まで水を汲みに行ったりという生活を送っていると聞いた。しかし、水道のない家庭や水を買うことができない人は、どのような物

自由研究

が含まれているか分からない川の水を飲み水として使っていると思うと心配になった。このような環境にいる人々に対し、私たちになにかできることはないだろうか、どのようにすればいいのか考えさせられた。安全な水のためには、浄水場を作り水道を整備するのがいいのだろうが、フィリピンの債務返済に充てる分が多く、教育や保健に配分されている予算が少ないという財政状況では、かなり難しいようだ。やはり低コストで一般市民に普及させることができるのは、井戸を掘ることではないだろうか。その資金を日本からの募金などでもっと支援できないかと思った。

私の学校でも井戸掘り募金という名称で毎月募金を行っているが、そんなに多くの募金は集まっていない。安全な水を飲むことができない人がどれだけいるのか、どれだけ危険な状態にあるのかをイメージすることができないからだと思う。私はフィリピンで実際に現地の人達の生活を目にして安全な水の必要性を実感した。今回私が現地で感じたことを、他の人たちにしっかりと伝えなければいけないと思った。

4 まとめ

多くの途上国では、安全な飲み水を得ることが難しい状況だ。そのため、汚れた水を飲み、それが病気の原因となることも多い。途上国における病気の原因の80%は汚水によるものだといわれており、コレラや腸チフス、赤痢などの感染症の主要な原因となっている。安全でない水や、不適切な衛生に起因する下痢性疾患で、毎日4,900人も

の子どもたちの命が失われている。清潔な水が手に入るようになることで、子どもたちの健康状態が改善する。「安全な水」を供給することができれば、人々の病気に対する不安や水汲みの労働が軽減され、「安心して生活できる社会作り」へとつなげることができる。また、水へのアクセスが改善した地域では、子どもたちの就学率が改善されたり、女性の社会進出が促進されたりすることが確認されている。

フィリピン派遣を通して、蛇口をひねれば安全な水を飲むことができる私達日本人がいかに恵まれているかを感じた。同時に、フィリピンで多くの人達と出会っていく中で、少しでも多くの人達に安全な水を使って欲しいという思いが心にわいてきた。そのために先進国で生きる私たちにできることは何なのか、もっともっと真剣に考えていかなければならない。まず、今回フィリピン研修に参加した私たちが、考え、小さなことでも出来ることをしっかり実行していきたいと強く思った。



ソルト・パヤタスでの交流

フィリピンの看護師について

福島県立あさか開成高等学校 2年 高橋 里加

フィリピン派遣に参加することが決まり事前学習をしていく中で、フィリピンの医療に関心をもった。私の将来の夢が看護師ということもあり、日本とフィリピンの看護師にどのような違いがあるのか、フィリピンの方々はフィリピンの医療に対してどう思っているのか疑問に思ったからだ。今回の派遣で、フィリピンのマニラ北西部、バタアン州の赤十字関係者13名にフィリピンの看護師と医療についてのアンケートに答えてもらい、日本での看護師経験のあるフィリピン人1名(60代)とフィリピンの看護師養成短大を卒業したフィリピン人(20代)にフィリピンの看護師についてインタビューした。

まず看護師のイメージや仕事について一番多かったのは「きつくて大変な仕事」だった。私は研修前に参加した、看護一日体験で看護師の仕事は、責任が重く、大変な仕事だということを強く感じていたため、納得の結果だった。私の周囲の友人たちからも同様のイメージが聞き取れた。どちらの国でも看護師のイメージは大きく変わらないということがいえるのではないかと感じた。

次に、看護師に求められる資質については、「高い技術、豊富な知識、やさしさ」が最も多かった。日本では看護師には「笑顔」が大切であることをよく耳にすることを考えると、予想したほど「笑顔」の票は多くはなかった。

また、看護師にとって働く上で大切なことは、「看護師が働きやすい病院を増やす」、「専門性を磨くこと」、「看護師自身の健康」、「高い専門性」という結果だった。「看護師が働きやすい病院を増やす」が一番多かった理由について、インタビューで聞いてみると、フィリピンで看護師にな

る人は多いが、高い収入を得るために海外に働きに出ってしまう人が多いということだった。私が詳しい話を聞いたフィリピン青少年赤十字の看護師のオウディ(AUDY)さんは、看護師、手術看護認定看護師、救命技能認定の3つの資格を取得していたが、現場では即戦力となる「経験」が重視されると話していた。



フィリピン赤十字本社 献血センター前

次にどういった状況の時に医師の診断を受けるか、という問いについては、わずかな怪我や体調不良では自宅で休むという回答が多く、日本とは違ってすぐに病院に行く習慣があまりないことがわかる。熱や風邪は病院よりクリニックで、クリニックは病院に比べて、より身近な存在で、早く診察してもらえることが理由である。3日目に訪れたパヤタス地区は、貧困が問題となっている地区であるが、病院のようなものが見当たらなかった。病気になったときの対応について、パヤタス地区の人々はケソン市のクリニックに行くものの、常に医師や看護師、薬や医療器具がそろっているわけではないため、帰されてしまうということだった。

また、医療費の負担についての質問では、「と

自由研究

ても高い」8人、「高い」5人で、安いと回答した人は誰もいなかった。今、福島県の18歳未満の子供は医療費が免除されているが、日本でも予防接種など保険適用外の医療費は自己負担で高額である。ただ、日本では大半の診療は保険適用となり、自己負担は2割から3割で済む。それと比較してみると、フィリピンは給料が低いにもかかわらず、診療費や薬代が全額自己負担で、救急車を呼ぼうにも金銭的な負担が大きい。そのため、病院に行くのが遅れ、重症化したり、不適切な処置によって死亡してしまうケースも少なくないそうである。そう考えると日本の社会保障とフィリピンの社会保障の間にも大きな違いがあり、フィリピンでの医療問題における大きな課題のひとつであるといえる。

最後に「医師、看護師、薬剤師、理学療法士、放射線技師、助産師、カウンセラー」のような医療従事者に対する信頼の程度を「とても信頼している」から「信頼していない」の5つのスケールで評価してもらった。結果は「とても信頼している」もしくは「信頼している」に回答が集まっており、医療従事者全体に対する信頼度は高いといえる。人の命を扱う責任と信頼が厚いからこそ、その信頼に答えることが医療従事者には求められていると感じた。

今回のアンケートの回答者は、フィリピン赤十字関係者だけで、非常に限られた対象であったが、全体的に見て、看護師のイメージや医療関係の仕事に就く人の信頼度は日本とほとんど変わらなかった。一方、看護師の働き先、医療負担は日本とフィリピンは大きく違った。このアンケートを通して、日本とフィリピンの看護師・医療の相違点について考えることができた。これから看護師を目指していく中で、日本の看護・医療だけでなく、世界には様々な地域があり、求められてい

る医療が異なることを意識して、海外の看護・医療にも目を向けていきたいと感じた。



フィリピンの救急車（赤十字マークがついている）

7日間ともに過ごした通訳のリンさんは、18歳～20歳の時に准看護師として日本の病院で働いていた。その当時の点滴は大きなビンで、ガーゼは洗って使い回し、注射の針は太く痛かったと話していた。フィリピンへの帰国、結婚、出産によって看護職からは離れたが、機会があればフィリピンでも看護師として働きたいという希望をもっておられたようである。しかし、時代と共に、点滴はビンから袋へ、注射も痛みを最小限にするために針は細くなる、医療は日々進歩している。資格をもっているとはいえ、時代にあった医療についていくための勉強は現実的には困難であったそうである。

私の様々な疑問に答えてくださったリンさんは、最後に「看護師としていつまでも働いていれば一生仕事はなくなるらない。今は建築や介護などでロボットが活躍し、人の手が使われなくなってきたが、ロボットに人間の代わりは出来ない。夢の実現のため頑張っしてほしい。」という言葉をくださった。どんなに技術が進歩し、作業が楽になってもロボットには心はない。研修やこのアンケートを通して看護師は常に学び続け、技術だけでなく温かい心が必要不可欠なのだと感じた。今回の研修全般を振り返って、私は将来、いつも笑顔で患者さんの心に寄り添う、そんな看護師になりたいと改めて感じる事が出来た。

「貧困を断ち切るには」

福島県立白河実業高等学校 3年 田代美月

私が小学生の頃、フィリピンのゴミ山で働く少女マニカちゃん存在を報道番組で知った。マニカちゃんは弟達の面倒や家事をして、ゴミ山でゴミを拾って、家計を支えていた。私は、その姿を見て胸が締め付けられた。日本では子どもが働くことは考えられないことだが、世界に目を向けると、日本で当たり前なのが当たり前ではないこともある。

私たちが泊まったマニラ首都圏の中心部にあるホテル付近は、高層ビルやホテル、デパートなどが密集して、ブランドの巨大看板などもあった。フィリピンは思ったよりも発展しているのではないかとその時は感じたが、中心部からだんだん離れてくると、トタン屋根で作られた家や、ボロボロの服を着ている人、それに、物乞いしている小さな子どもなど、極端な貧富の差が見られた。

特定非営利活動法人ソルト・パヤタスの活動の一環であるスタディツアーではいわゆるゴミ山で生計を立てている方々の住む地区を訪問したが、貧富の差を肌で感じる機会となった。ゴミ山の内部に入ることはできなかったが、ゴミ山の周辺まで行くと、その規模は想像を超えて大きく、報道番組で見た光景とは全く異なるものだった。

住宅地の細い路地を抜けると、慰霊碑のある広場があり、今から15年前の2000年7月10日に起きたゴミ山崩落事故の犠牲者の方々の名前が刻まれていた。その広場で、ゴミ山崩落事故の被災者シェリーさんの貴重なお話を聞くことができた。事故は、その前日から降り続いた雨が原因で、約2ヘクタールの地域を、ゴミが土砂の様に流れ地域をのみ込んだ。シェリーさん一家もその被害に遭い、家で寝ていた長男のジョシュアくんの下半身がゴ

ミに埋まってしまい、助け出すことはできたが、右腕を負傷し、切断する選択を余儀なくされた。シェリーさんは10年経過した現在でも涙を出してしまう程の辛い体験を私たちに話してくれた。



路肩に積み上げられているゴミ袋

その後、ソルト・パヤタスのインターンをしている吉田さん同行のもとシェリーさんのお宅に訪問した。家の外はゴミ山からの悪臭が漂っていた。家の中に入ると、4畳程の部屋で、昼間なのに薄暗い部屋だった。家にはジョシュアくん、弟や妹、近所の子どもたちがいた。シェリーさんから、家族の事やジョシュアくんの話を聞き、ジョシュアくんはソルト・パヤタスから奨学金を貰い、学校に通学していることがわかった。シェリーさんは「子どもが学校に行けて幸せです」と話していた。シェリーさんの夫はゴミ山で再利用出来るものを拾うスカベンジャーとして働き、回収しているものは、プラスチック・金属類・ビン・紙・木材・食べ物（人用・養豚用）などで、1日の収

自由研究

入は100ペソ～150ペソ、日本円では約200円～300円である。(ちなみにマニラ首都圏の最低労働賃金約P 450/日、日本円では約1,100円) また、ゴミの種類や季節により収入が異なり、スカベンジャーの収入は不安定である。一番印象に残っているのは、朝食がご飯とコーヒー、昼食は5人で1kgの米と野菜、夕食は魚とご飯で、時にはご飯だけという日もあるそうだ。パヤタス地区に住む多くの人は、ご飯を満足に食べることが出来ず、十分な栄養を摂取する事ができない人が、日々危機感を持って生活しているそうである。そうした危機感と隣り合わせの生活を強いられている人は、フィリピンだけではなく他の国など数えきれない程いる。私はお腹いっぱい食事と、学校に通える幸せを改めて感じた。

ソルト・パヤタスでの研修ではこの他にも、子どもエンパワメント事業やママエンパワメント事業を見学した。子どもエンパワメント事業では主に、中途退学せざるを得ない小・中・大学生に奨学金支援を行うことにより、就学・復学をサポートしている。奨学生の対象は、大家族や家庭の経済状況が厳しい家庭や、母子家庭、父子家庭であり、子どもと親が教育について熱心であることが条件である。また、学校の授業は約50人という大勢の人数で行うので、授業についていけない生徒がでてくる。そのため、奨学金を受けて大学まで行けるようになった大学生と外部からボランティアでやってくる大学生が、補習授業を行っている。ソルト・パヤタスが運営している子ども図書館では、月に1度、絵本の読み聞かせをしており、図書館は奨学生だけではなく、地域の人たちに開放している。

ママエンパワメント事業では、ゴミ山崩落事故でゴミ山が閉鎖され、ごみ拾いで収入を得ていた現地の女性のために、クロスステッチ製品の制作・



ママエンパワメントの刺繍作品の販売

販売を行なうLihkaという就労場所を提供している。安全な仕事で収入を得るだけでなく、技術を習得し、様々な能力や人間性を向上させる目的も果たしている。

パヤタス地区で、不安定な収入でかつ危険な仕事であるスカベンジャーとして働く人は約2,000人いるが、団体が行なっている活動は、パヤタス地区の貧困を無くすきっかけになると思う。奨学金によって学校に行ける子どもたちが増え、安定した職に就き、十分な収入を得れば、生まれた自分の子供を学校に通わせることができる。それは貧困の負の連鎖を断ち切ることに繋がると思



パヤタスでの家庭訪問後に交流

う。

今回のフィリピン派遣で、自分の目でゴミ問題や貧富の差など、貧困問題を目の当たりにし、世界の問題に目を向けることで、日本では当たり前のことが世界では当たり前ではないことが分かり、私自身の世界観が広がったように感じた。貧

困から抜け出し、人々が安定した暮らしができるようになるには、より多くの人が貧困問題に向き合い、行動することが必要である。そのためにはフィリピン派遣に参加した私たちが、フィリピンの現状を伝え、世界の問題に興味を持ってもらえるようにすることが大切である。



フィリピンの生活環境について

学校法人昌平饗東日本国際大学附属昌平高等学校 2年 箱崎 瑠依

私は、派遣に行く前の研修で『フィリピンの水道水は、飲むとお腹を壊してしまう。』と聞いていた。このことがきっかけで、フィリピンの生活環境についてしっかり学んで来ようと決意した。

私は、派遣に行く前にフィリピンの生活環境を予想していた。水道水は日本よりは少し安全性に問題があるかも知れないが、水はどこにでもあるだろう。食生活は魚介類と果物を多く食べている。交通は日本よりは自動車の数が少なく、バイクや徒歩が多い。トイレは、衛生面が欠けているトイレ。貧困の差についてはフィリピン全体が貧困で貧しい生活を誰もがして、「差」はあまりないのではないかと考えていた。

●水道水について

フィリピンの水道水は、見た目は無色透明で日本と変わらなかったが、鉄と消毒液が混ざった独特の匂いがした。また、シャワーを浴びると肌が荒れ、髪はキシキシと傷み、独特の匂いが移ってしまった。その為、派遣生活ではミネラルウォーターを飲料水やうがい水として過ごした。

私は、フィリピンでも水道の蛇口を捻れば水が出るのが当たり前だと思っていたが、パヤタス地区では一部にしか水道がひかれておらず、その一

部の地域でも使える時間帯が決まっていると知った。そこで私は、時間外にどうしても水が必要になったら、どのようにして水を確保しているのか疑問に思い、現地の人に聞いてみた。

- ① 使える時間帯まで待つ。
- ② 井戸から水を汲み上げて使う。

このような貧困地区では、水は時間を考えながら大切に使い生活していることが分かった。



移動中の風景

●食生活について

フィリピンの主食はお米である。見た目はタイ米に似て細長く、パサパサとして甘みの少ないのが特徴である。副食（おかず）は魚介類と鶏肉で、なかでも海老が特に多く、現地の方は殻をスプーンとフォークで器用に剥いて食べていた。また鶏

自由研究

肉料理が多く、私も1日1回はいただいた。飲み物（水以外）は、コーラ、果汁たっぷりのフルーツジュース、アイスティーが一般的に飲まれているようだった。フィリピン料理は全体的に甘く味付けされており、日本との食文化の違いを感じた。

パヤタス地区では、朝食におかずは無く、米とコーヒーだけで済ませる家庭が多いようである。また、稼ぎが少ないと夕食は食べられないと現地の子供達に聞いた。そのためか小柄で実年齢より幼く見える子供達が多く、年齢を聞いてみると、4歳位に見えた子が実際は7歳であったり、13歳位かと思った子どもが実際は16歳だった。フィリピンの貧困地区では食生活環境が悪いことから、成長に影響が出ているのではないかと思った。

●交通について

7日間派遣のフィリピン滞在中、信号機を見たのは2、3台だけだった。警備員らしい人が道路に立ち、手信号で交通整備にあたっている場面を目にしたこともあったが、車は道路の車線を無視して何列にも並び、車間距離もギリギリで走行していた。私は、なぜ事故が起らないのか疑問に思い、少し観察したところ、クラクションが数多く聞こえることに気が付いた。お互いにクラクションを鳴らして注意を喚起することにより未然に事故を防いでいることがわかった。

●トイレについて

フィリピンで私たちが利用していたトイレは水洗だったがトイレットペーパーが備え付けされていなかった。使用済みの紙は流さずゴミ箱に捨てる仕組みになっていた。また、水もボタンを押して流すタイプと、バケツの水を桶で汲み自分で便器の中へ流すタイプの二通りあった。それは、使

用している紙の質の違いで、水にとけにくいことがその理由だったが、日本の様式と異なるため、慣れるにはかなり時間が必要だと感じた。

●貧富の差

パヤタス地区を訪問して最も感じたことはフィリピンでは貧富の差が大きいということである。都市部の裕福な家庭の子と比べ、パヤタス地区の子供達は、貧困を理由に学校にも通うことが出来ず、ゴミ山からゴミを拾って生計を立てて生活していた。同じ子供なのにどうしてこんなに違いがあるのだろうと、理不尽さを感じた。貧富の差をなくすためには、行政の支援も得ることをしながら、国を超えた支援の必要性を感じた。

以上のことを実際に体験した結果、水道水・食生活は予想とはほぼ同じであったが、水道がひかれていない地域があることに驚いた。全体の味付けは甘酸っぱく、飲み物はとても甘いものが多かった。交通については予想とかなり違って、自動車やバスが多く使われていたのは予想外だった。トイレは想定外のことばかりで、トイレに慣れることが大変だった。貧困の差については予想をしていたよりも全体的に豊かな生活をしているように感じたが、しかし、それは一部だけであって貧富の差がかなり大きい地域もあるようだった。



ホテルのような豪邸 昼食の招待を受けた

●事前・事後研修会の開催

○第1回事前研修会

日 時：平成27年6月14日(日)

10時30分～15時30分

会 場：日本赤十字社福島県支部 3階 会議室

内 容：

1. 日本赤十字社福島県支部あいさつ
2. 派遣メンバー自己紹介
3. 平成27年度派遣事業について
 - (1) 派遣事業の目的・概要
 - (2) 派遣日程案
 - (3) 交流内容について
4. 今後の日程、自己学習、準備について質疑応答
5. 赤十字の活動について
6. 青少年赤十字について
7. その他



アイスブレイクで自己紹介

○第2回事前研修について

日 時：平成27年7月29日(水)

10時30分～15時30分

会 場：日本赤十字社福島県支部 3階 会議室

内 容：

1. 派遣事業について
 - (1) 旅行日程、旅行手続き、経費、現地の状況について

(2) 交流内容、交流物品

- 研究テーマ
- 実施報告書担当について
- 文化交流内容練習
- 現地活動にあたって
- トピックアルバム等提出物の確認
- その他

(3) 引率者役割分担

2. 報告書の作成
3. 今後の予定



交流内容の確認

○事後研修

日 時：平成26年9月26日(土)

10時30分～15時30分

会 場：日本赤十字社福島県支部 3階 会議室

内 容：

1. 報告書について
 - (1) 訪問日誌について
 - (2) 所感について
 - (3) 自由研究について
2. 各地区総会での報告のための資料の確認
3. その他

●報告会の開催

○県北地区高校JRC

日 時：10月28日(水)

場 所：日本赤十字社 福島県支部会議室

参加者：50名

報告者：山口愛由美、小松 紗綾、大木 信二
佐藤 佑樹

聴講者の感想：第二次世界大戦など歴史的なことも知ることができた。子どもたちの状況が貧富で差があると思った。裸足の子どもがいることは日本では考えられないと思った。

聴講者の感想：鳥の数が7,000もあるとは思わなかった。子どもが花を売ったりしている。学校に行っていないのだろうと思った。



60人以上のメンバーの前での報告です

○県南地区高校JRC

日 時：11月6日(金)

場 所：安積高校

参加者：73名

報告者：高橋 里加、田代 美月

聴講者の感想：日本の隣国だとは思わなかった。裸足で歩いている子どもがいたり、食事がコーヒーだけの時があるなど、貧富の差が激しいのに驚いた。



2人で報告しました

○県高校JRC

日 時：11月13日(金)

場 所：清稜山倶楽部

参加者：121名

報告者：山口愛由美 小松 紗綾 大木 信二
佐藤 佑樹 高橋 里加 田代 美月
箱崎 瑠依

聴講者の感想：パヤタスのゴミ山での崩落事故で命が失われている子どもがいる、そしてそこで働いている子どもがいることを知った。家族が力を合わせて子どもを学校に行かしているのがわかった。NPO法人の運営に日本人が関わっていることがわかった。自立するために教育が大事だと言っていた。笑顔が印象的だった。



100人以上のメンバーに報告です

○いわき・相双地区高校JRC

日 時：11月9日(月)

場 所：いわき市生涯学習センター

参加者：74名

報告者：箱崎 瑠依

平成27年度 日本赤十字社福島県支部主催
青少年赤十字国際交流事業“フィリピン派遣”
実 施 要 項

1. 目 的

青少年赤十字の実践目標の一つである「国際理解・親善」の具体的事業として、県内の青少年赤十字メンバーを海外の赤十字加盟国へ派遣し、同国の青少年赤十字メンバーらとの交流研修を通して、国際性豊かな青少年を育成し、本県青少年赤十字活動のより一層の推進を図るために実施する。

特に、福島県は東日本大震災により地震・津波災害に加えて世界に類のない原子力発電所からの放射性物質の大量放出の被害を受け、県民は未だにその後遺症にあえぎながら、復興を模索している状態にある。

今回は被災し仮設校舎及び学校の一部を間借りして生活している学校からも募集を行いこの事実を海外に伝えるとともに数多くの支援を受けたことへの感謝も伝えながら現地の青少年との交流を図る。

2. 主 催

日本赤十字社福島県支部、青少年赤十字福島県指導者協議会

3. 後 援

福島県教育委員会、福島県高等学校校長協会

4. 実施機関

平成27年8月9日(日)～15日(土)6泊7日 成田⇄マニラ(滞在研修)

5. 派遣国、地域

フィリピン共和国 マニラ首都圏、近隣州

なお、実施機関と派遣先の詳細については、日赤福島県支部とフィリピン赤十字社との間の十分な調整のもとに決定し実施する。

6. 派遣人員(予算ベース)

高校生青少年赤十字メンバー並びに被災地高校(青少年赤十字未加盟)の高校生8名(各地区から2名程度)

高等学校青少年赤十字指導者(教師)並びに被災地高校教師2名

日本赤十字社福島県支部または管下施設職員 2名 合計12名

7. 参加要件

(原則として下記の条件を満たしていること)

(1) 青少年赤十字メンバー

- ① 地区主催の青少年赤十字リーダーシップ・トレーニング・センターを終了し、ボランティアリーサービス、先見等の基本的理解ができていること。

日頃の青少年赤十字活動に積極的に参加していること(学年は2年生が望ましい)

- ② 心身とも健康で、事前・事後研修、支部長(知事)表敬訪問ほか現地派遣中の集団生活による研修に支障なく参加できること。

- ③ リーダーとしての資質を備え、将来とも赤十字活動に関わっていこうとする意欲があること。

- ④ 語学力は必ずしも重視しないこととするが、適応性が求められる。

(2) 被災校高校生

- ① 心身とも健康で、事前・事後研修、支部長(知事)表敬訪問ほか現地派遣中の集団生活による研修に支障なく

参加できること。

- ② 研修の成果を学校や地域に還元していただくこと。

- ③ 語学力は必ずしも重視しないこととするが、適応性が求められる。

(3) 青少年赤十字指導者(教師)

- ① 青少年赤十字指導者として十分な指導歴を持ち、リーダーシップ・トレーニング・センター、県指導者講習会等の参加経験があり、青少年赤十字ほか赤十字の基本的理解ができていること。

- ② 心身とも健康で、事前・事後研修、支部長(知事)表敬訪問ほか現地派遣中の集団生活による研修に支障なく参加できること。

- ③ 将来とも赤十字活動に関わっていこうとする意欲があること。

(4) 被災高校教師

- ① 心身とも健康で、事前・事後研修、支部長(知事)表敬訪問ほか現地派遣中の集団生活による研修に支障なく参加できること。

- ② 研修の成果を学校や地域に還元していただくこと。

(5) 記録写真・ビデオの利用

事前・事後研修、現地派遣中の派遣メンバーの活動状況を写真ビデオに撮影したもののについて、赤十字の事業紹介等広報活動で使用することに承諾いただけること。

8. 応募書類、応募期日

高校生及び指導者(教師)の派遣希望する青少年赤十字加盟校並

びに被災校の高校生および教師は、応募書類（別紙１、別紙２）を平成27年５月８日（金）までに日赤福島県支部へ到着する様に送付するものとする。

なお応募受け付けは、一つの高校につき高校生１名とするので、学校内で良く調整願いたいこと。

9. 派遣メンバーの選考

(1) 選 考

日赤福島県支部は、提出書類を審査し、特に青少年赤十字加盟高校については過去の派遣実績、地域バランス等を考慮して派遣メンバーを決定する。

日赤福島県支部は、結果を速やかに応募のあった高校へ通知する。

(2) 参加承諾書

派遣メンバーとして決定された者は、速やかに参加承諾書（別紙３、４）を日赤福島県支部へ提出する。

(3) 派遣の取り消し

派遣メンバーとして決定された者について、後日不相当と認められた場合には、派遣を取り消すことがある。

10. 研修内容

- (1) フィリピン赤十字社訪問・関連施設見学
- (2) 青少年赤十字加盟学校訪問・青少年赤十字メンバー、地域住民との交流
- (3) 伝統文化・史跡視察・フィリピンの災害対応研修
- (4) その他 フィリピン家庭訪問、青年ボランティアとの交流、関係団体訪問を予定

11. 経 費

(1) 参加者本人負担

パスポート取得経費、海外旅行保険代、予防接種代（１万円を超えた場合に超えた分）

(2) 日本赤十字社福島県支部負担

国内交通費、渡航代、宿泊・

食費代、予防接種代（上限１万円）ほか(1)以外の経費

12. 事前・事後研修

派遣に先立ち、派遣国の状況、交流内容等についての事前研修会を実施する。

帰国後は、報告書作成、各地区での報告会実施のための事後研修会を実施する。日程の詳細は、派遣決定者に追って通知する。事前・事後研修の参加に要する旅費は日赤福島県支部が負担する。

(1) 第１回事前研修会

- ① 期日 平成27年６月13日または14日（20日または21日）
- ② 場所 日本赤十字社福島県支部
- ③ 内容 派遣事業の概要、赤十字と青少年赤十字について代表・団員としての心構えについて、フィリピン青少年赤十字との交流内容について、他

(2) 第２回事前研修会

- ① 期日 平成27年７月18日または19日または20日（25日又は26日）
- ② 場所 日本赤十字社福島県支部
- ③ 内容 派遣日程について、事前研修のまとめ、研修旅行に関する諸注意、他

(3) 事後研修

- ① 期日 平成27年９月19日または20日又は23日（26日又は27日）
- ② 場所 日本赤十字社福島県支部
- ③ 内容 派遣概要の報告、報告書の作成について、資料整理、その他

(4) 支部長（知事）表敬訪問

出発前または帰国後、福島県庁との調整により実施する。

13. その他

帰国後は研修の成果を自校のほ

か、地区総会、県秋季総会で報告いただくことになります。そのための総会に出席いただきますようご配慮願います。

なお現地の治安事情等のやむを得ない事由により派遣を延期または中止することがあります。

持 参 の 交 流 物 品

公式訪問先への記念品

- 三春駒
- トピックアルバム
- 福島県、福島市、英文パンフレット

フィリピンRCYメンバーへの記念品

- JRCバッジ
- JRCワッペン
- 手作り巾着

公式訪問時の交流物品

- JRC旗一式
- 福島県、学校生活、JRC活動パネル
- 法被（よさこい用）
- 絵描き歌用お面
- ジェット風船
- 日本国歌CD
- 音楽CD

あ と が き

東日本大震災で中断された日本赤十字社福島県支部主催国際交流事業“フィリピン派遣”が再開され連続3年目になりました。

1年目は県下の全高校に呼びかけ未加盟校からの生徒2名、教師1名を含み生徒10名、指導教師3名、支部職員2名の15名での派遣事業でした。2年目からは未加盟校は震災時の東電福島第一原子力発電所事故により移転や仮住まいの高校に、本年度はそれに新設校の「ふたば未来学園高校」の8校に参加案内を行いました。生徒8名、指導教師2名、支部職員2名の11名～12名で構成されました。（昨年度、今年度も未加盟校からの参加者はいません。）

事前研修時より自由研究のテーマを決め、県TCなどで交流内容の確認などを行い準備に余念がありませんでした。報告書にはフィリピン赤十字ユースのメンバーとの交流が生き生きと報告されています。この3年間、変わらず行われているのはバタアン原発の見学とパヤタス地区の訪問です。福島県のメンバーは原発内部に入って時間の止まったような空間の発電所内の見学に考えるものがあるようです。また、パヤタスでは学校に行くことは勿論ですが食べることに、病気のときに医療機関を利用するなど当たり前と思われることが、そうでない現実やその生活を目の当たりにして言葉を失います。でもそこで生きる人たち、特に子どもたちの懸命さはこれからのJRCの活動を示唆してくれるものになっています。今後とも海外派遣事業が継続し、JRCメンバーの国際理解・親善の育成につながるようにと思っています。

この機会を与えてくださった学校関係者、保護者の方々、フィリピン赤十字社・支部と青年ボランティアの方々に始め皆様に感謝いたします。

日本赤十字社福島県支部青少年赤十字担当 金 子 久仁子

